

長崎県西彼杵郡多良見町津波御所在

伊木力・熊野神社遺跡

発掘調査概報

1985.3

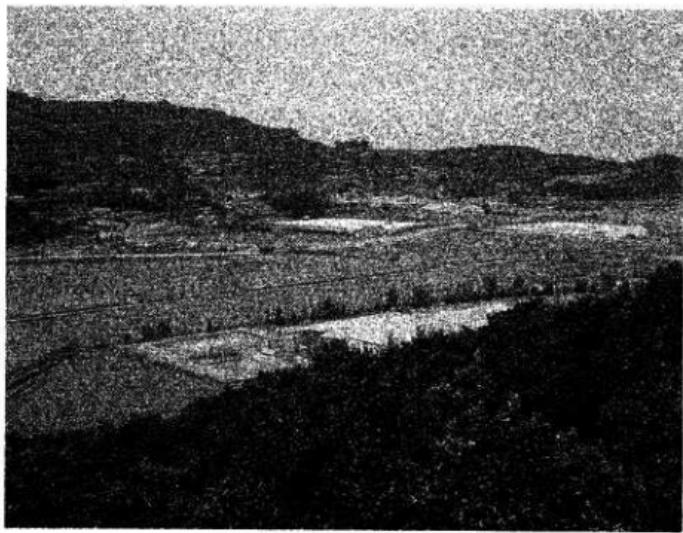
多良見町教育委員会
同志社大学考古学研究会

例　　言

1. 本書は、昭和59年8月20日より9月10日まで実施した、長崎県西彼杵郡多良見町舟津郷に所在する伊木力・熊野神社遺跡の試掘調査概要報告である。
2. 調査は、伊木力小学校の通学道路建設予定地における遺跡範囲の確認を目的として、多良見町教育委員会が事業主体となり、国庫補助ならびに県費補助をうけ、同志社大学考古学研究室に依頼されたものである。調査は長崎県文化課正林護氏、森浩一同志社大学教授の指導のもと、同志社大学講師松藤和人が担当した。
3. 動物遺存体については松井章（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）氏、¹⁴C年代測定結果については山田治・小橋川明（京都産業大学理学部）氏より玉稿をいただいた。また、植物遺存体については辻誠一郎（大阪市立大学理学部）、貝類については石井久夫（大阪市立自然史博物館）、石材については横山卓雄（同志社大学工学部）氏にそれぞれ同定をお願いした。記して謝意を表わすものである。
4. 本書の編集には松藤があたり、鋤柄俊夫、水ノ江和同がこれを補助した。執筆分担は目次に記すとおりである。本書掲載の写真は松藤が撮影した。本書に用いた高度は全て標高である。
5. 出土遺物は、同志社大学考古学研究室にて整理中である。
6. 本書の作成に際して多くの方々の御教示を得たが、紙数の都合により芳名を割愛させていただいた。
7. 本調査に直接かかわった多良見町教育委員会事務局職員は次のとおりである。教育長・大石章、事務局長・長野崇、吉田幸英、櫻山洋次、山下正、村島義仁。

目　　次

I 調査に至る経緯（松藤和人）	1	(4) 石器類（村山一弥）	29
II 遺跡の位置と環境（鋤柄俊夫）	2	(5) 土製円盤（山本英之）	35
III 調査の経過（松藤和人）	5	(6) 貝類・貝輪（伊藤政美）	35
IV 調査の概要		(7) 植物遺存体（伊藤政美）	37
1 層序（村山一弥）	7	〔付篇I〕 熊野神社遺跡における動物遺存体について	39
2 遺構（村山一弥）	9	〔付篇II〕 液体シンチレーション法による熊野神社遺跡の ¹⁴ C年代について	44
3 遺物の出土状態（水ノ江和同）	10	(1) 中世の遺物（菅栄太郎）	18
4 遺物		(2) 弥生土器・土師器（鋤柄俊夫）	20
(3) 繩文土器（水ノ江和同）	21	(3) 繩文土器（水ノ江和同）	21
		V 総括（松藤和人）	46



遺跡遠景（東南から）



大形加工材山土状態（北から）

序

昭和59年度の「熊野神社遺跡」包蔵範囲確認調査が完了し、その成果がこのように発表されることは、誠によろこばしいことであります。

本調査は、明治7年に創立された伊木力小学校の移転改築にあたり、その通学道路建設予定地に古代の土器片等が発見されたため、同志社大学考古学研究室に遺跡の包蔵範囲確認調査を依頼したものです。

遺跡は豊富な資源をもつ大村湾に面し後背地はみかん畑に囲まれていますが、かつては動植物に恵まれた山野であり、時には武士たちが攻防をくりかえした山城もありました。

遺跡からは縄文早期から中世に至る大量の遺物が出土し、この地には数千年にわたって、人々の喜怒哀楽の生活が展開されたことを物語っています。

今後、予定されている本調査により、当時の生活と歴史がより一層明らかにされるものと期待されます。

本調査の時期は炎天の候であったにもかかわらず、早朝から夜間に至る調査作業と真摯な研究の成果がこのたびの報告書となったことを思う時、同志社大学をはじめ、関係研究機関、文化庁、県文化課、地元関係者の皆様方に心から感謝いたすものであります。

本書が文化財保護および学問の進展に寄与することができれば幸と存じます。

昭和60年3月

多良見町長 石丸義雄

はじめに

熊野神社遺跡の発掘の相談がもちこまれたとき、多良見町には私がいつも記憶しているほどの考古学上の遺跡はなかった。だがその遺跡の所在地が多良見町舟津郷であることを知って、ひそかに念頭に浮んだことがある。

奈良時代に編纂された肥前國風土記の彼杵郡周賀郷の項に、船に関するすこぶる興味ぶかい伝説がのせられていて、それは大村湾南岸地方の土地柄を知る有力な手がかりだと私には思えた。その伝説の要点は次のとおりである。

昔、氣長足姫（神功皇后）が新羅と戦することになり、船を周賀郷の東北の海にとめておいたところ、舳と舳をつなぐ杙が二つの巨岩になった。それだけでなく、伴の船まで風にあって難破しかけたとき、土地の人の櫛比表麻呂がその船を救助したという。つまり遠来のよそ者には航海のむつかしい土地であることや、船の集まるところであるということなどがその伝説に示されているのである。

今回の発掘では果たせるかな28個の碇石が出土した。碇石の現用例では一隻に2個積んでいるようであるから、ここにはまだ実体はあらわれていないけれども、船が集まっていた形跡があり、前述の肥前國風土記の記載がいよいよ重みをましてくる。それと曾畠や轟系の土器の多いことも、それらの土器が九州の西部の海岸部に散在し、漁撈民というか海洋民との関係が從来からも重視されていたことを想起させる。どうやらこの土地には、たんにありきたりの遺跡が埋っていたというのではなく、活発で行動的な生活をした先祖の歴史をひもとく宝庫が眠っているようで、今回の発掘がそのヴェイルの一部をはずしてくれたと私は考えている。発掘を推進し、あるいはそれを実現させた多くの人たちのご努力に感謝する次第である。

同志社大学教授 森 浩一

I 調査に至る経緯

昭和57年、多良見町教育委員会は伊木力小学校の移転に伴い、運動場（造成済み）の西端に新たに通学道路の建設を計画した。

昭和57年7月24日、長崎地方は未曾有の集中豪雨にみまわれ、長崎大水害として知られる大きな被害をこうむった。多良見町内でも被害が続出し、このとき運動場西端の側溝も土砂で埋没するに至り、浚渫工事がおこなわれた。昭和59年3月、その排土中から、舟津郷在住の坂口光雄氏によって縄文土器、弥生土器、石器類、土師器、須恵器、石鍋など各時代にわたる遺物が採集され、同氏より多良見町教育委員会に連絡があった。

事態を重視した多良見町教育委員会は、長崎県教育委員会文化課との協議のち遺跡として認定する一方、通学道路予定地内に予想される埋蔵文化財包蔵地の範囲確認調査の必要性を認識し、同志社大学考古学研究室に調査依頼の意向を打診した。これにさきだち、多良見町木床遺跡の範囲確認調査の依頼を受けていた同志社大学考古学研究室では本遺跡の試掘調査を受諾するとともに、同志社大学教授森浩一の調査指導を受け、同講師松藤和人が夏期休暇を利用して現地での調査を担当することになった。

調査にさきだち、昭和59年6月11日、松藤・鍬柄は多良見町におもむき、木床、熊野神社両遺跡の調査予定地、熊野神社遺跡の採集遺物を観察するとともに、長崎県文化課（正林謙）、多良見町教育委員会（長野崇）との間で、調査時期・期間、調査方法等について協議をおこなった。

調査は、多良見町を事業主体に、国庫補助を受け、埋蔵文化財包蔵地の範囲確認を目的として、昭和59年8月20日より9月10日まで実施した。

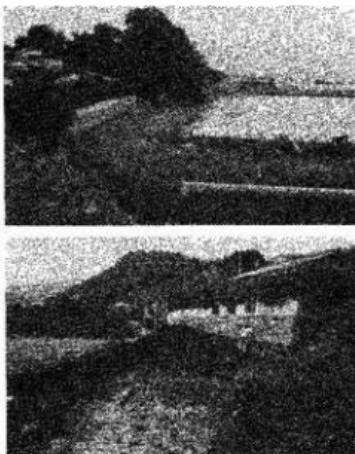


図1 遺跡近景（上：南から）
答土除去風景（下：北から）



図2 遺跡発掘風景（第9トレンチ、東から）

II 遺跡の位置と環境

遺跡は、長崎県西彼杵郡多良見町舟津郷字松手1128、1134番地に所在する。遺跡の所在する多良見町は長崎市の東北約12kmに位置し、県下最大の半島である西彼杵半島の基部にあたり、大村湾の南奥部に面している。東方には大村湾をへだてて佐賀県境に聳える多良岳（標高983m）を望むことができる。県下最大の平野を有する対岸の大村市までわずか6kmをへだてるにすぎない。多良見町を含む西彼杵半島は、山塊が急傾斜をなして海に落ちこむリアス式状の海岸地形をみせる。そのため半島の山塊に源を発する中・小の河川は、いずれも矮小で沖積地も少なく、その規模も小さいものとなっている。

遺跡の所在する伊木力地区は、北流し大村湾に注ぎこんでいる伊木力川の沖積作用によって形成された、水田地帯を中心とした小規模な平野部にあたる。なお、伊木力川をへだてて本遺跡の東南方約500mには、縄文時代晩期末葉～弥生時代中期の遺物を中心出土した伊木力川遺跡¹⁾がある（図3の2）。また、この平野部をとりまく東・西の山塊は、その斜面を「伊木力みかん」の産地として知られるミカン畑に利用されている。

このうち伊木力川の西方に位置する山塊は、標高267mを測り、独立山塊状を呈する。この山塊より派生する尾根は、差別浸食により、その末端にいくつかの小規模な丘陵状地形を派生しながら北および東方へ延びている。これらの尾根のなかで最大のものは、山塊より北東方向へ延び、大村湾へ突出した岬を形成しており、その南側基部にはリアス式状の地形を利用して舟津港が築かれている。

また、東方へ延びる尾根には、その末端が独立丘陵状を呈するものがみられる。この東側斜面は急な傾斜をみせているが、その立地から中世期に山城が築かれた可能性が認められ、一部に遺構らしきものの存在が伝えられている（図3の3）。

今回設定した調査区は、西方より延びる尾根の先端が沖積地に没する傾斜変更線付近にあたり、現伊木力川との直線距離は約120mを測る。調査区の東側は現在伊木力小学校の運動場（標高2.3m）として整備されているが、もともとこの付近は標高2mにも満たず、過去において調査区周辺には海岸線がひろがっていたものと考えられる。

くわえて、西方の山塊より派生した尾根の末端は、本遺跡の西南方で分岐し、その一端は調査区西方の鞍部をへて熊野神社の鎮座する舌状丘陵（標高7.4m）を形成し、平野部へ突出している。また、他の一端は調査区の南端付近で小規模な尾根状地形をみて平野部へ張り出している。このため国道207号線は、この付近で等高線に沿って尾根の末端を迂回するように北東から北西への路線を大きく屈曲させている。

したがって、熊野神社をのせる舌状丘陵の東側斜面はゆるやかな窓曲をみて沖積地に接しており、当地が過去において入江状の地形を呈していたことが推察され、調査区中央部はあたかもなだ

らかな傾斜で海面に没する汀線にあたっていたものと考えられる。

なお、国道をはさんで遺跡西方の丘陵上からは広く遺物の発見が伝えられており、遺跡範囲の確認を含めた対策が要請されるところである。

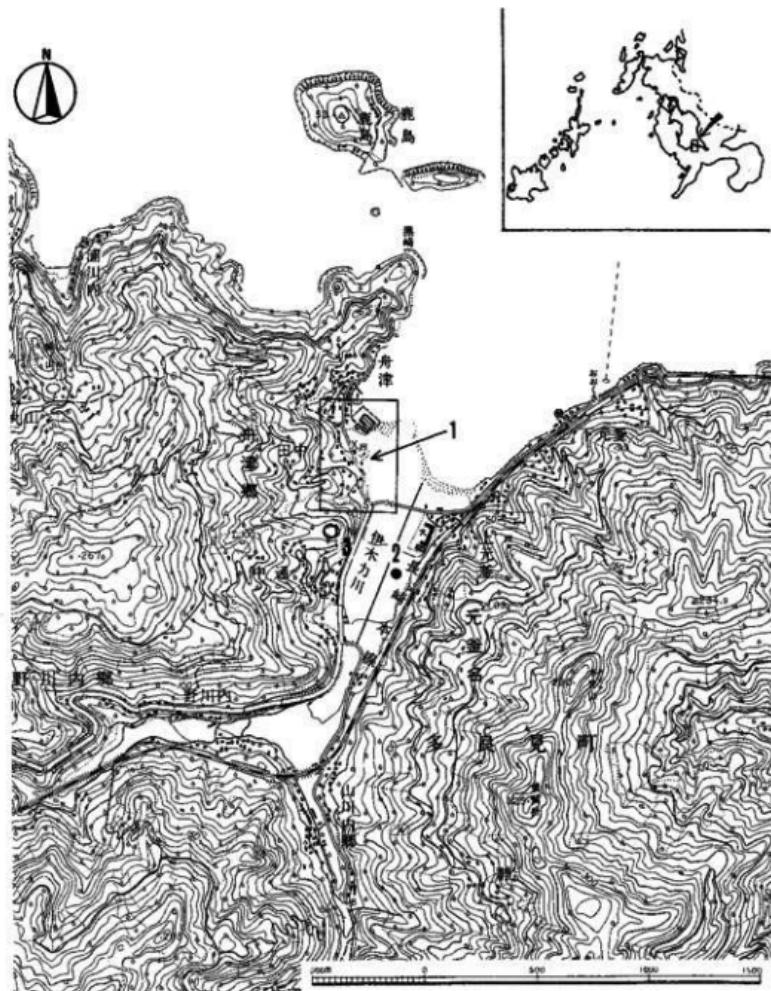


図3 熊野神社遺跡と周辺の道路（1熊野神社遺跡、2伊木川遺跡、3山城路）

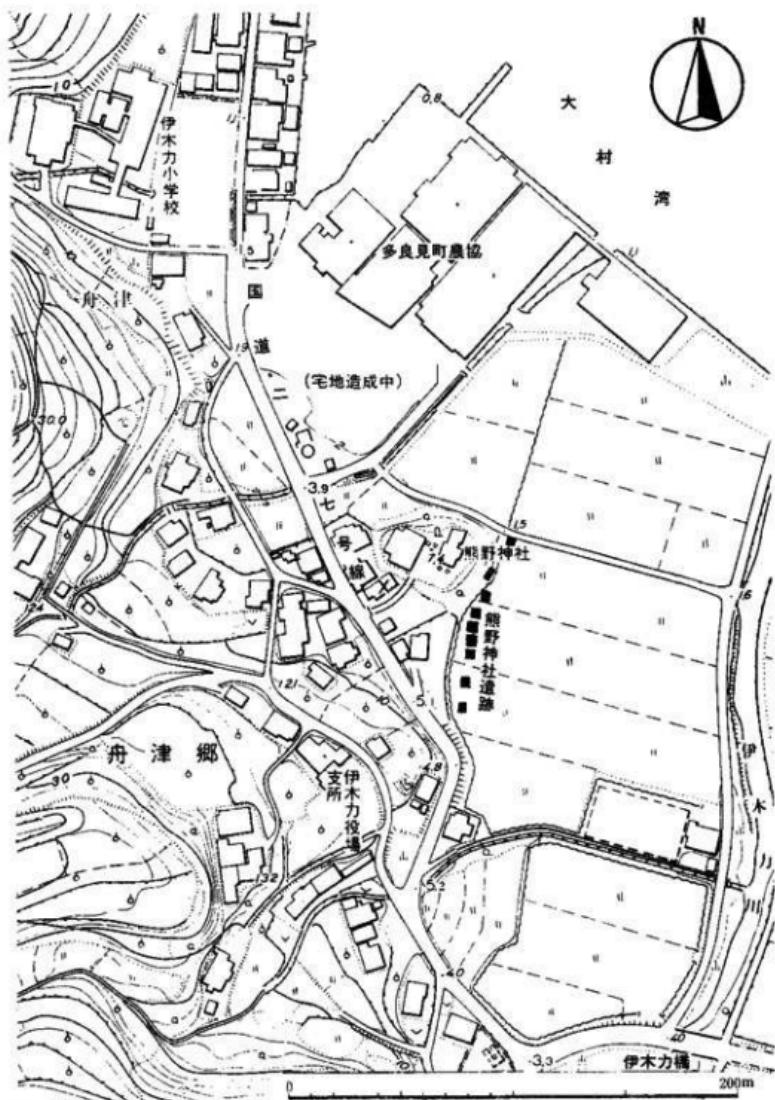


図4 熊野神社遺跡周辺地形図

III 調査の経過

調査は、遺跡範囲の確認と遺物包含層の遺存状況の把握を主目的としたため、通学道路予定地（長さ90m、幅4m）とそれに付随する道路側溝、さらには運動場の西端に設置予定の防護フェンス部分をとりこんだ区域を最終的な調査対象域とした。したがって、最終的な調査対象域は長さ90m、幅7mの630m²に達することとなった。

試掘調査という性格とも相い俟つて、頭初、調査対象地に10m間隔で3×3mのトレンチ（調査坑）を設定する方向で調査を企図したが、とくに調査対象地の北半部にあっては丘陵部に接するためか巨岩の埋没が顕著で、試掘用トレンチの設定位置と面積に多少の修正を余儀なくされるに至った。

なお、調査対象地は、運動場の造成工事の際、約70cmの厚さで客土が全面に置かれており、これを機械力によって排除し、旧耕作土以下を手掘りによる調査の対象とした。客土の排除にやや手間取ったが、トレンチはスキ取りが完了した部分から順次設定した。

トレンチは調査の着手順に第1～第7トレンチの7か所設定したが、第2・3トレンチ間での遺物包含層の遺存状況に照らして、第2トレンチと第3トレンチ間に4×4mの第8・9トレンチを追加設定した。第1～第7トレンチの中では、地形上の制約もあって第6トレンチだけが3×2mとやや小さく、他は3×3mを占める。今回調査したトレンチの総面積は92m²となる。

8月19日 午後現地に到着し、調査資材のチェックのうち宿舎への移送をおこなう。

8月20日～23日 機械力を導入し客土の排除をおこなう一方、順次、トレンチを設定。この間、21日のみ台風10号の接近により作業を中断。

8月24日～28日 第1～第7トレンチの精査をおこなう。この間、旧耕作土、緑灰色砂質土の掘り下げと遺物の採集に努める。

8月29日 第3トレンチで疊層（III層）に達するも縄文・弥生土器、土師質土器、白磁等を混在し、搅乱層が続く。他のトレンチも同様な出土状況を示す。正林謙氏視察。

8月30日 第5～第7トレンチで基盤層に到達。第3トレンチで黒褐色砂質土（IV層）中から縄文・弥生土器と共に獸骨・種実・流木の出土を見る。町議会文教委員会議員視察。

8月31日 第8・9トレンチの精査開始。
第2トレンチの疊層中（標高0m付近）より
曾畠式土器がまとまって出土。

9月1日 第2トレンチで基盤層に到達。
第3トレンチでは有機質遺物の出土が続く。



図5 遺跡発掘風景（南から）

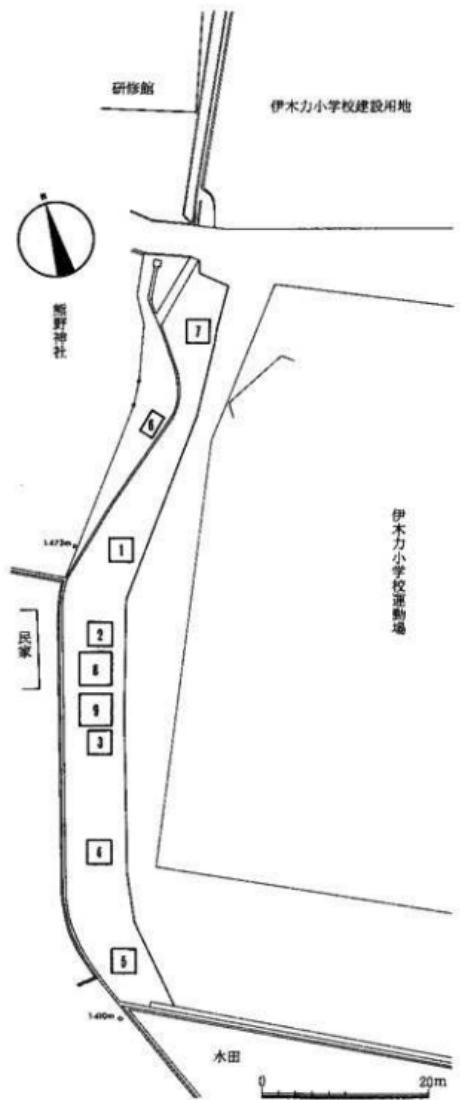


図6 トレンチ配置図

9月3日 第3トレンチの東北隅に混貝土層を検出。縄文土器・石器類、有機質遺物を多量に出土。第8・9トレンチでは搅乱層を掘り下げ。

9月4日～5日 第8・9トレンチで礫層、黒褐色砂質土を掘り下げるも搅乱状態が続く。第3トレンチでは混貝土層の下底部に至って出土量が急激に減少。

9月6日 第3トレンチで褐色粘質土を精査するも、遺物をほとんど見ず。第9トレンチでは、混貝土層中において曾畠式土器の大形破片、碇石、獸骨等が全面にわたって同一レベルで出土。

9月7日 調査成果を記者発表。第8トレンチで基盤層に到達。第9トレンチは、出土遺物の実測後、掘り下げを進める。

9月8日 第9トレンチの混貝土層下底部で丸木舟とみられる大形加工材を検出。第3・8トレンチは土層断面図を作成。

9月9日 現地説明会を開催。町長視察。大形加工材の実測。その処置につき協議。

9月10日 大形加工材については本調査での採り上げを期し、現状のまま保存措置を講じる。

9月11日 大形加工材の埋戻しを完了。午後、調査団を解散。

IV 調査の概要

1 層序

本遺跡の堆積物は、調査地南、北端の丘陵裾部と谷底部での堆積環境の違いを反映して、大きく二つのグループに分かれる（図7）。前者は、第1・2・4・5トレンチで、後者は、第3・8・9トレンチである。ここでは、第1・2・4・5トレンチの層序については個別に説明し、第3・8・9トレンチについてはほぼ共通した層序をみせるため括して説明することにする。

第1トレンチは、地表から、I層（旧耕作土）、II層（橙色砂質土）、III層（暗緑灰色砂質土）、IV・V層（黒褐色粘砂質土）の順で堆積する。V層は、径10cm大の角礫を多量に含む礫層である。また、径50cm以上の巨礫を混じえる。出土した遺物の量は少なく、IV・V層において縄文（前・後期）～弥生時代・中世の遺物をわずかに検出した。

第2トレンチは、I層（旧耕作土）、II層（褐灰色砂質土）、III・IV層（黒褐色粘砂質土）の順に堆積している。III・IV層は、第1トレンチのV層同様、礫を多く含み、粘性の強弱によって分層した。第2トレンチでは、比較的多くの遺物を検出した。I層は攪乱層であり、II層は縄文・弥生土器・中世の遺物を混在し、III層は縄文・弥生土器にはば限られ、IV層は縄文前期の遺物をわずかに包含する。

第3・8・9トレンチは、調査地西側の丘陵に湾入する谷状地形の谷底部に位置し、基盤層に至るまで最も厚い堆積物を有し、出土する遺物の量も膨大である。このことは、遺物の堆積環境を示

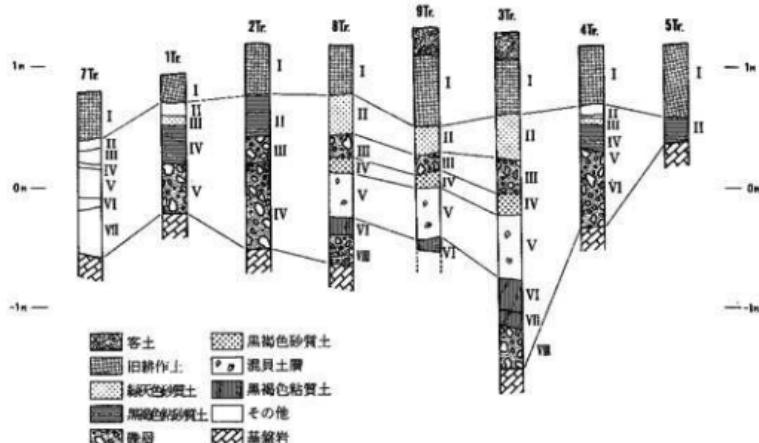


図7 熊野神社遺跡上層柱状図

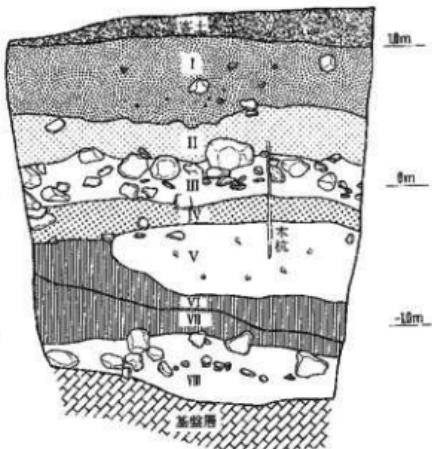


図8 第3トレンチ北壁土層断面実測図

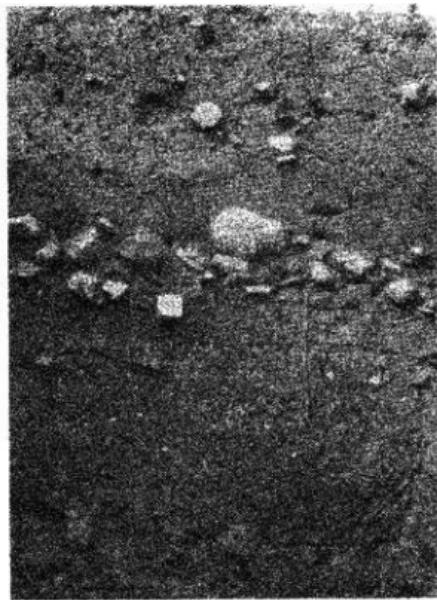


図9 第3トレンチ北壁土層断面

第3トレンチ土層断面図色表

- I. Hue.2.5Y 黄灰5/1 粘質土
- II. Hue.7.5GY 暗緑灰1/3 砂質土
- III. Hue.5YR 黒褐5/1 砂質土
- IV. Hue.5YR 黒褐2/1 粘砂質土
- V. Hue.5YR 黒褐2/1 粘砂質土
- VI. Hue.7.5YR 黒2/1 砂質土
- VII. Hue.5YR 黒褐2/1 粘砂質土
- VIII. Hue.5YR 墓赤褐3/3 粘砂質土

唆しており、土砂の堆積しやすい谷部に遺物が集中する状況を示している。

層序は、I層(旧耕作土)、II層(緑灰色砂質土)、III層(疊層・マトリックスは褐色砂質土)、IV層(黒褐色砂質土)、V層(混貝土層・黒褐色粘質土)、VI層(黒褐色粘質土)、VII層(黒褐色粘砂質土)、VIII層(暗赤褐色粘砂質土)の順になる。III層は、径10cm大の疊を多く含む。V層は、海産の貝類を多く包含する混貝土層である。VIII層は基盤層に接し、角礫を多く含んでいる。これらのトレンチはきわめて多くの遺物を包含しており、とくにII～V層において著しい。I層は搅乱層である。II～IV層は縄文～弥生時代・中世の遺物を混在する。V層は、上部に微量の弥生土器を混在するものの、縄文時代前期の良好な遺物包含層であり、自然遺物も多く検出した。VI層以下においては遺物をほとんど含まないが、第9トレンチにおいては、VI層中より縄文時代早期末の轟式系土器を1点検出した。

第4トレンチについては、I層(旧耕作土)、II層(明黄褐色砂質土)、III層(黒色粘砂質土)、IV層(暗緑灰色砂質土)、V・VI層(黒褐色粘砂質土)となる。V・VI層

については、VI層のほう
がより大きな礫（径30cm
前後）を含み、粘性の強
い土壤からなるという基
準で分層した。なお、包
含する遺物の量はきわめ
て少ない。

第5トレンチについて
は、I層（旧耕作土）、II
層（黒褐色粘砂質土）と
いう順になる。遺物はほ
とんど含まない。

第7トレンチについて
は、他のトレンチとは層
序を異にする。地表から
I層（旧耕作土）、II層（黒
色粘質土）、III層（黒褐色
粘砂質土）、IV層（灰色粘
砂質土）、V層（黒褐色粘
質土）、VI層（泥炭層）、
VII層（暗灰黄色粘砂質土）
の順になる。遺物はほと
んど含まない。

2 遺構

今回の調査で検出した遺構は、第6トレンチの石列と、第3トレンチの木杭である。

石列は、地表下約70cmで検出した。第6トレンチの層序は、地表から赤褐色砂質土、褐色砂質土の順に堆積している。いずれも、現在の竹林によって攪乱をうけており、腐植に富む土からなる。石列は、径20cm大の礫がセンターに沿ったかたちで一列に並んで検出された。礫は平坦な面を西側にむけて並ぶ。石列の東側および西側には、径50cm大の礫が不規則に散在していた。丘陵上からの転落かと思われる。石列の下は、すぐ岩盤となる。石列の周辺からは少量の近世陶磁器片を検出しておらず、その築造時期も、それを著しく通らないものと考えられる。

第3トレンチの木杭は、トレンチ北・西・東壁において検出された。そのうち北壁の木杭の大き



図10 第4トレンチ東壁土層断面

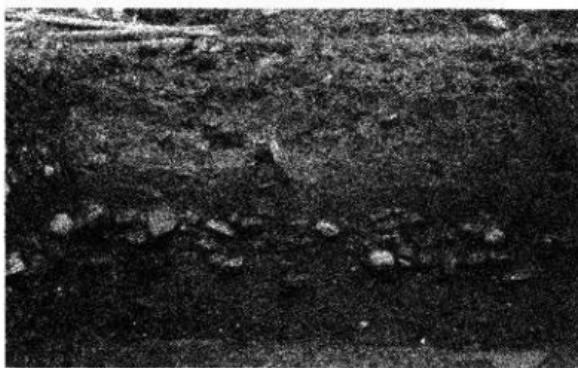


図11 第9トレンチ東壁土層断面



図12 第6トレンチ石列遺構(南から)

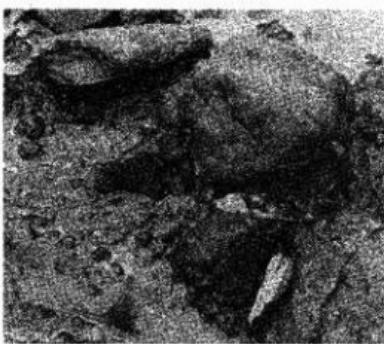


図13 第2トレンチ遺物出土状態(II層)

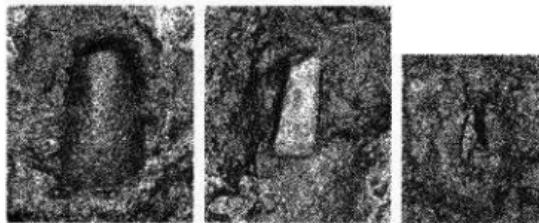


図14 第3トレンチ石斧・石鎌出土状態(IV層)

さは、径約3cm、全長約80cmである(図8)。断面で確認する限り、III層からV層まで入りこんでおり、III層の堆積以後に打ちこまれたものである。したがって、中世以降に形成された可能性が強い。

なお、今回の調査では、明らかに縄文時代に属すると考えられる遺構は検出していない。

3 遺物の出土状態

本遺跡における遺物は、ほとんど遺構を伴うことなく、自然層中に包含された状態で出土した。すでに前章で説明したように、調査区の中央に位置する第3・8・9トレンチは互いに共通した層序をみせ、本遺跡の形成状況を窺ううえで重要なデータが得られた。ここでは他のトレンチとはやや異なった遺物の出土状態を示した第2トレンチと、第3・8・9トレンチのなかでも特に良好なデータが得られた第9トレンチとをとりあげて、説明を加えることにする。

第2トレンチの土層は、4層に分層された。このうち、I～IV層上部までは搅乱層であり、土器片はいずれも小片で摩滅をうけている。I層は旧耕作土であり、縄文～近・現代まで各時代の遺物を包含する。II層からは縄文土器・弥生土器・土師質土器・磨製石斧・削器・双角状石器・石錐・土製円盤が混在して出土した(図

13)。このなかでも特に石斧は注目され、本トレンチから集中して出土し、その形態も多岐にわたる。同層は最も新しい遺物に照らして、中世以後に形成されたものと推定される。III層は、巨礫を多く含む層である。出土遺物は縄文土

器・弥生土器・石器類のほか、種子・流木等の植物遺体が少量出土した。上記の事実から、本層は、弥生時代以降に形成されたものであると考えられる。IV層もかなり礫を含む層で、上部では摩滅した縄文後期土器片を中心に、弥生土器・石器類・チャンチンモドキが少量出土した。一方、IV層下部（標高0m付近）においては、摩滅を受けた曾畠式土器が比較的集中して出土した。

第9トレンチはI～V層上部まで攪乱を受け、これらの層から出土した遺物は摩滅が著しく、原位置と考えられる出土状態をみせるものはない。土器は小片ばかりで、接合資料もほとんどない。以下、I層から順に説明をおこなう。

I層に関しては第2トレンチと同様である。

II層は緑灰色砂質土である。出土遺物は、縄文土器（前期～晩期）をはじめ、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・輸入磁器・瓦質土器等の土器類、石斧・石鎌・石錘・石匙・つまみ形石器・削器などの石器類および石鍋の出土をみた。本層中から出土した遺物の量は多量で、他の層からの出土量を凌駕する。

III層は礫を多く含む層（礫層）である。出土遺物の内容はII層とほとんど異なるが、この層からチャンチンモドキをはじめとする植物遺体が出土しはじめる。しかし、その出土量は比較的少ない。II・III層は出土遺物からみて、中世以降に形成されたものと考えられる。

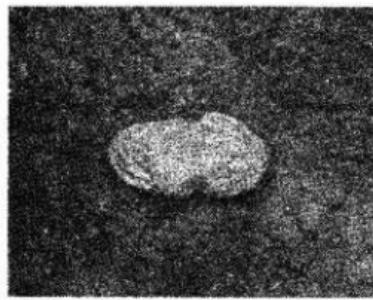


図16 第9トレンチ碇石出土状態（V層上部）

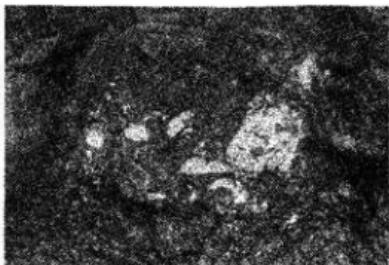


図15 第3トレンチ貝（上：V層上部）
獸骨・牙・出土状態（下：IV層）

IV層はIII層と同様に縄文土器（前期～晩期）が主体を占め、他に弥生土器が少量認められる。石器類に関しては、II・III層と同様な構成をみせる。

また、石鍋は検出されなかった。本層よりイノシシやシカをはじめとする動物遺体の出土をみたが、量的にはわずかである。

V層は多量の海産貝類を含む層厚約50cmの混貝土層である（図11）。出土遺物は、上部約20cmにおいて曾畠式土器を中心とする縄文後期土器片等を、下部約30cmにおいては曾畠式土器のみを出土した。

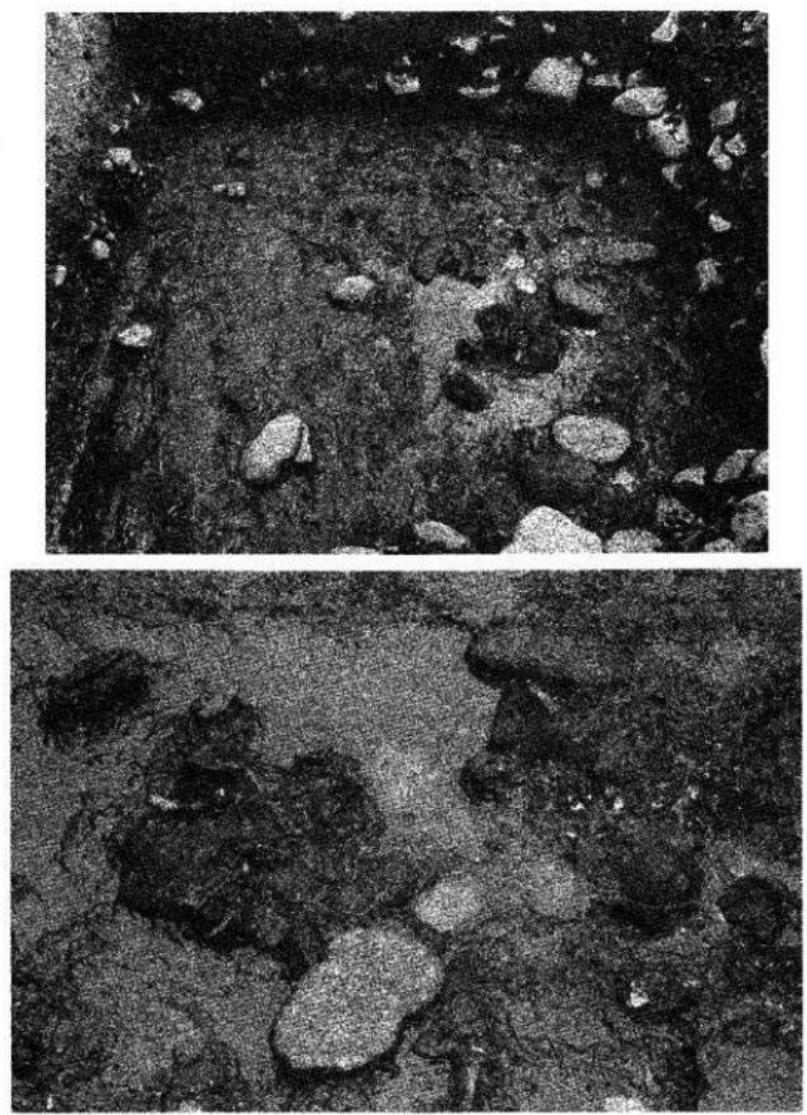


図17 第9トレンチ遺物出土状態（V層下部）

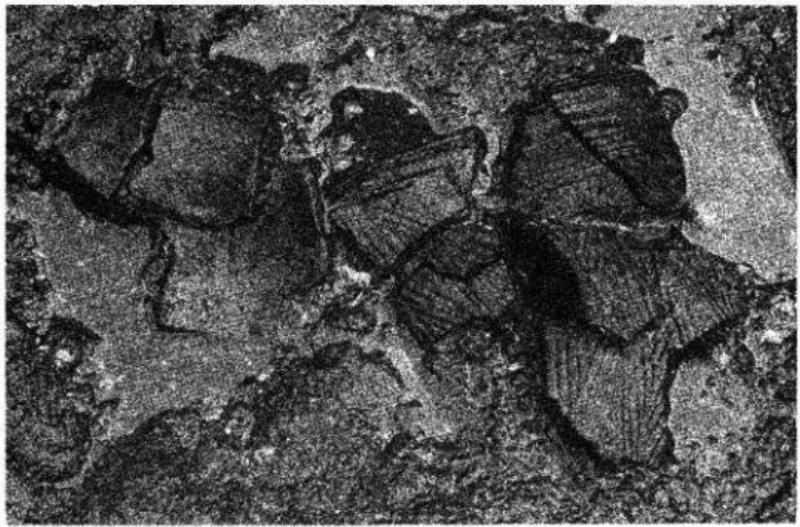
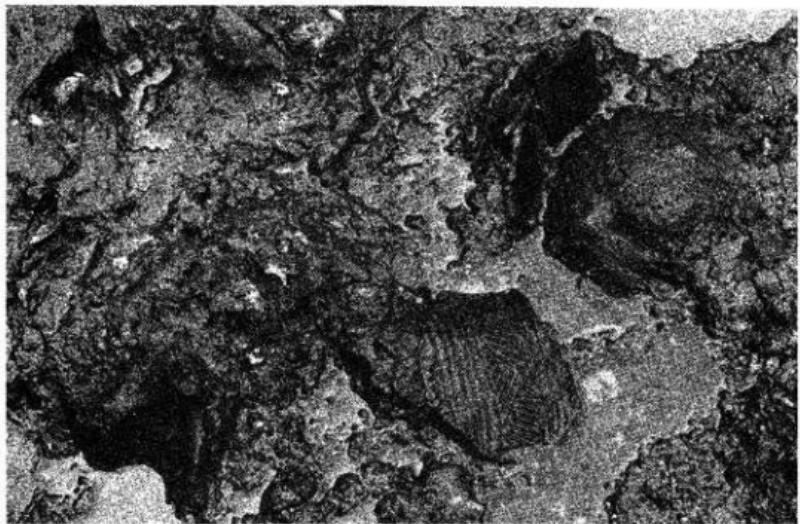


図18 第9トレンチ遺物出土状態（V層下部）



図19 第9トレンチ獸骨出土状態 (V層下部)

したがって、本層は2層に分層できる可能性があるが、調査時点では両者の間に明確な一線を引くことができなかった。上部からの出土遺物は、曾畠式土器を主体とした縄文土器（前期～晩期）・弥生土器・石斧・石鎌・石錐・削器等のほかに、碇石の出土をみた（図17）。また、植物・動物遺体の出土量は膨大な量に達した。IV層とV層上部は、弥生時代に形成されたものと考えられる。

V層下部は前述したように、曾畠式土器以外の土器を含まない（図18）。層厚約30cm（標高-0.2m付近）の比較的均質な層で、層自体は北西から南東へわずかに傾斜する。主な出土遺物は、曾畠式土器（図18）・石斧（図42）・碇石・骨角器・貝輪（図49）、貝類・獸骨（図19）・植物遺体である。いずれも散在するが摩滅の痕跡はなく遺存状態は良好である。なかでも曾畠式土器は縁辺がシャープで破片も大きいくつかのブロックにまとまって出土し、それらは接合により完形品ちかくまで復原できる。以上の事実により、本層は曾畠式期に形成された単純層と考えられる。なお、丸木舟と考えられる大形加工材は、本層の最下底より出土した。

VI層は大形加工材を避けてその周囲を約20cm掘り下げただけである。遺物は東壁下より縄文式系土器（図37・38）を1点検出したにすぎない。獸骨・流木等の自然遺物は検出されなかったが、第3・8トレンチの同層からは若干検出された。今回、第9トレンチのみは、VI層上部で調査を打ち切ったために、その詳細については、次回の調査の結果を待つてあらためてふれることにしたい。ただ、

この第9トレンチに限っては、VI層がV層と明確に分層されることから、両層に時間的先後関係が生じることは確実といえよう。

丸木舟（図20）

第9トレンチV層下部の最下底より、丸木舟と考えられる大形加工材がトレンチの対角線上（北西—南東）に出土した。両端がトレンチ外へ延びるためその全貌は把握できないが、調査時点では確認された最大長は3.8m、最大幅は0.8m、厚さは3～4cmを測る。遺存状態はきわめて悪く、腐朽が進んでいる。表面にはフナクイムシによって穿れたとみられる小穴が無数に存在する。丸木舟としての横梁は確認されなかつたが、舷側に関してはその最下部とみられる部分が確認された。なお、材質は未同定である。

以下、大形加工材を丸木舟と推定した根拠を列挙する。

1. 随所に工具による加工痕が観察され、

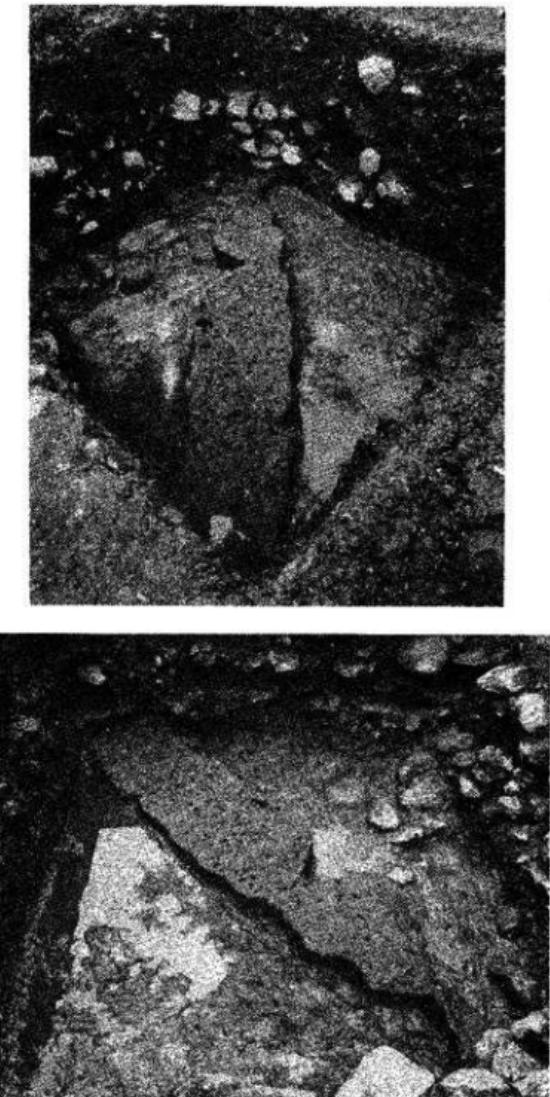


図20 第9トレンチ丸木舟出土状態（上：東南から、下：北から、V層下部）

明らかに人為的な木製品である。

2. 一部に内湾する曲面をとどめているが、他の部分には、土圧によって平面的になった際に生じたと考えられる亀裂がみられる。つまり、本来は全体が内湾した形態を呈していたと想定される。
3. 出土地点は旧地形において入江内だったと考えられる。
4. V層が自然堆積の貝類（シラオガイ等）を含む混貝上層からなること、またナクイムシによるとみられる小穴が無数に認められることから、遺棄されたのち旧汀線付近にながらく遺存していたと考えられる。
5. 長軸が地層の走行傾斜に沿っており、旧汀線の地形に沿っている自然な埋没状態を示すとみられる。
6. 大形加工材の周囲すなわちV層下部から、多数の碇石が出土した。

以上の根拠より、大形加工材は正置し、しかもその大部分が舟底部に該当する丸木舟であると推定した。しかし、すでに述べたように今回の調査ではその全貌が把握できなかったため、最終的な結論は次回の調査を待ってくださいことにしたい。

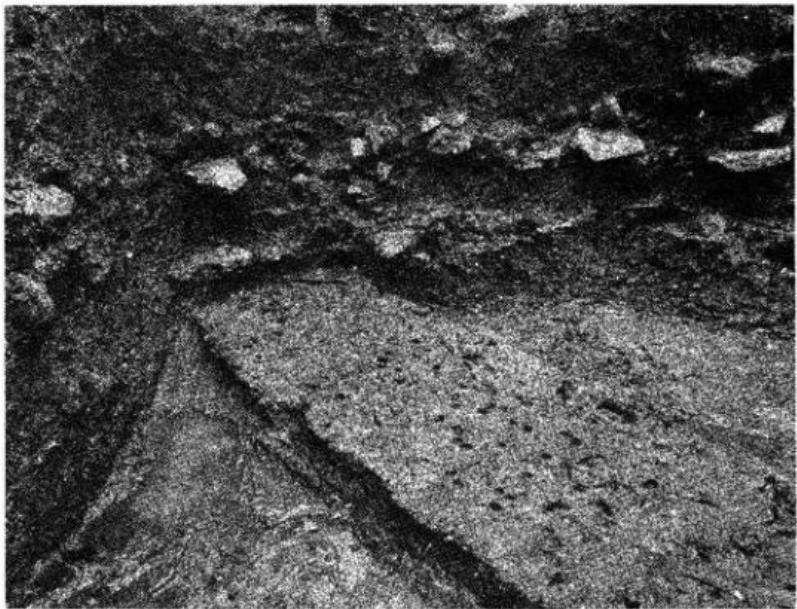


図21 第9トレンチ丸木舟出土状態（北から、V層下部）

なお、年代に関しては、本例がV層下部の最下底より出土した事実とVI層出土遺物の年代觀とを絡めて、現状では縄文時代早期末～前期に比定することを許容しよう。



図22 第9トレンチ森式系土器出土状態 (VI層)

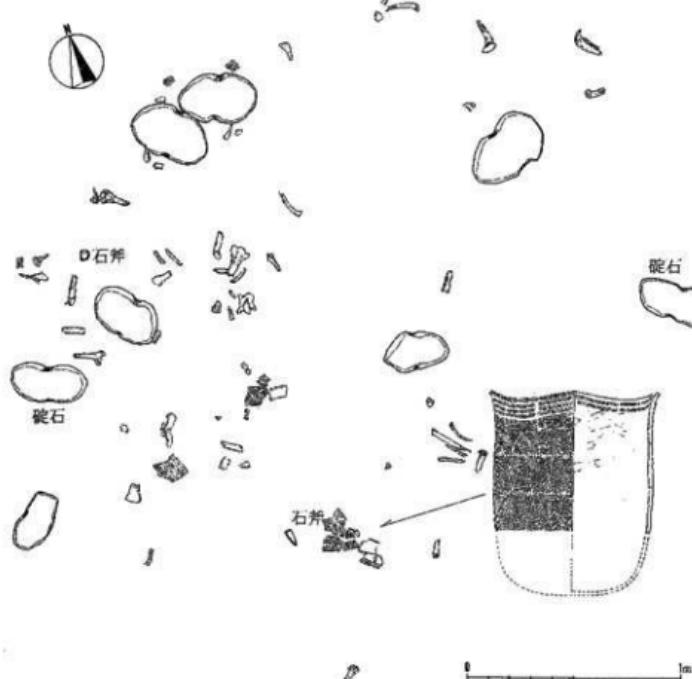


図23 第9トレンチ遺物出土状態 (黒は石器、青は獸骨、赤は土器) (V層下部)

4 遺 物

(1) 中世の遺物 (図24~27)

当遺跡における中世遺物は、中国製輸入磁器、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器、石鍋が出土したが、ほとんどが摩滅した細片である。出土状態は、すべてのトレンチから、緑灰色砂質土層を中心に包含されたかたちで出土し、第3・8・9トレンチに関してはIV層まで出土している。

図26は、出土遺物のうち形態が復原できるもの一部である。輸入磁器には白磁碗、青磁碗・皿がある。1は大形の玉縁状口縁をもつ白磁碗口部である。釉は淡灰色で比較的薄くかかっている。2は端部を短く外反させる口縁をもつ白磁碗であり、釉調は1と同様である。型式はそれぞれ横田・

森田分類²⁾による

IV-1類・V-4

a類に属する。その他、龍泉窯系青磁碗I-2類・皿

I-1b類、同安

窯系青磁碗III-1

類・皿I-1b類

が出土しているが、大部分は龍泉窯系のもので占められる。土器類としては、土師質壺と瓦質擂鉢がある。3・

4は土師質壺であ

る。3は調整が内外面とも回転ナデ、底部外面は回転糸

切りをみせ、色調

は淡褐色で胎土は緻密、焼成は良好である。4は調整が内外面とも回転

ナデ、底部外面は

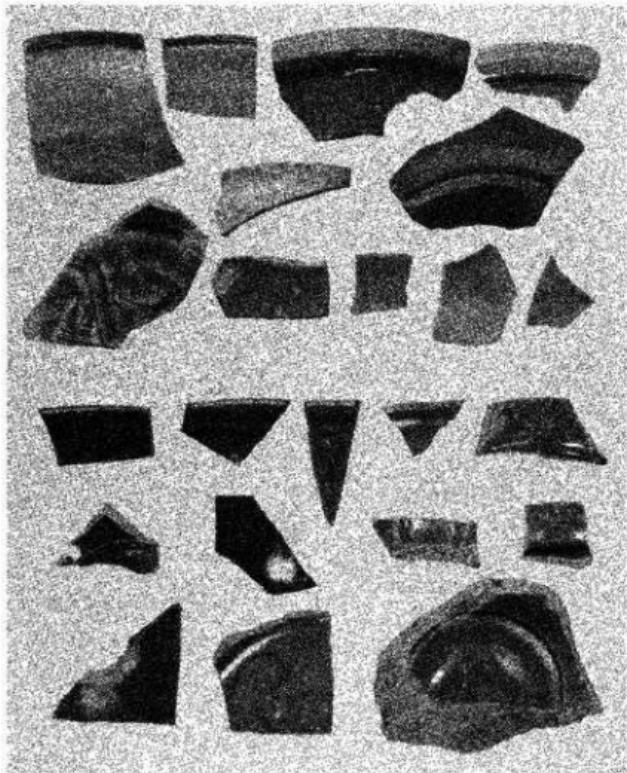


図24 輸入磁器 (上段: 白磁、下段: 青磁)

1/2

摩滅のため判別は難しい。色調は淡黄褐色で胎土・焼成は3と同様である。5は瓦質擂鉢である。外面の調整は底部近くまで押サエを施し、底部際はヘラケズリ、押サエの最下部には縦位のハケ目状の調整がみられる。底部外面の調整は摩滅のため不明である。内面は回転ナデによる調整の後に4本単位の擂目を施しているが、過度の使用のため著しく摩耗している。色調は外面が黒灰色でススの付着がみられ、内面は灰色である。胎土は緻密である。6は滑石製石鍋である。器壁は平均1.2cmとやや肉厚で、内外面ともノミによるケズリ痕がよく残っている。色調は暗緑色であるが、外側の突帯より下方は炭素を付着した結果、黒色を呈する。用いられた滑石は多孔質で、材質は良好とはいえないが、おそらく長崎県西彼杵郡大瀬戸町付近産出³⁾のものを使用したのであろう。

上記の資料より出土遺物の時期を



図27 滑石製石鍋（第4トレンチV層）

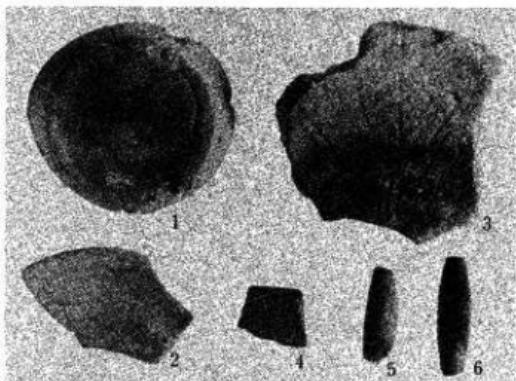


図25 土師質壺（1, 2）瓦質擂鉢（3）
須恵質鉢（4）土錠（5, 6） 1/2

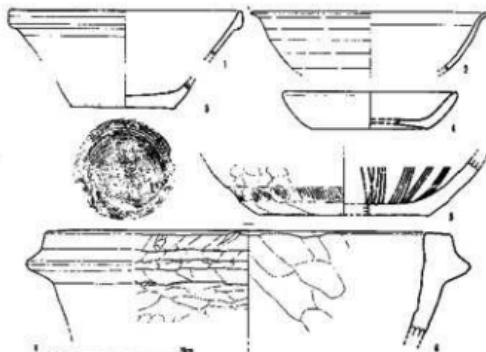


図26 中世遺物実測図
(1・2白磁碗, 3・4土師質壺, 5瓦質擂鉢, 6石鍋)

考察すると、まず磁器類は輸入磁器の編年によれば、12~13世紀におさまるものと考えられる。土師質壺は法量から13世紀後半と考えられるが、一方、博多遺跡・地下鉄線内32・34号土塗でも同法量の類例⁴⁾がみられ、それぞれ12世紀後半・13世紀前半に位置づけられている。また瓦質の擂鉢は、北部九州において14世紀には確実に認められる⁵⁾。多孔質の滑石を用いた石鍋は類例の少ないものようであるが、時期的には鎌倉時代とされるものであり、上記の遺物の年代におさま

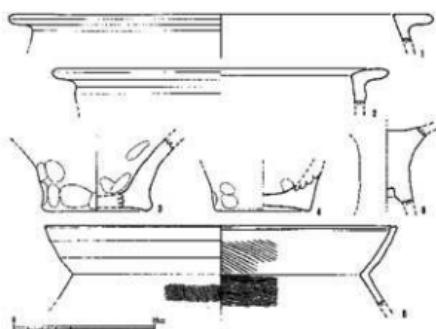


図28 弥生土器(1~5), 土師器(6)実測図

図28の1・2は弥生時代中期の壺の口縁部である。胎土は比較的緻密であり、微細な長石粒と雲母片を含む。色調は暗褐色である。

3・4は弥生時代中期土器の底部である。いずれも外面の底部際に指揮サエ痕が認められる。胎土は1・2と同様で、褐色を呈する。

5は弥生時代後期の高壺脚部である。胎土は緻密で、微細な雲母片がわずかに含まれ、色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。

6は土師器壺の口縁部である。口縁部内面および体部内外面はハケ調整が施され、口縁部外面は横ナデで調整されている。色調は灰褐～暗褐色を呈する。

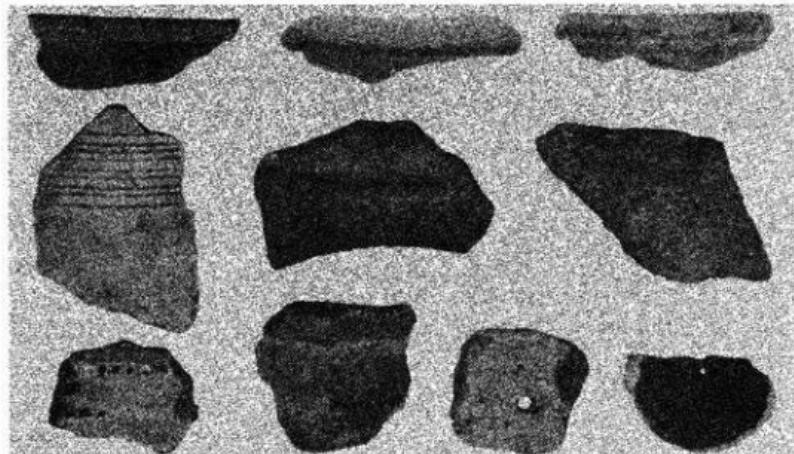


図29 弥生土器・土製品

(3) 縄文土器

本遺跡の出土遺物において縄文土器の占める割合は大きい。それらは一部の曾畠式土器・森式系土器を除いて、すべて攪乱層中に包含され、小片で摩滅が著しく接合もほとんどできない。しかし、型式学的見地からそれらの時期比定がおおよそ可能であり、本遺跡が縄文時代に関しては、早期末から晩期初頭まで営まれてきたことが知られる。ここでは代表的な土器をとりあげ、時期ごとに簡単な説明を加える。

晩期土器（図31上）

量的には少ないが、いずれも晩期初頭の御領式に属するものであろう。入念に磨研され、色調は黒褐色を呈する。

後期土器（図30・31下）

量的に最も多く、本遺跡の最盛行期を示すと考えられる。1は外面に刺突文と押引文が、内面には外面と同一原体による押引文が施される。ここでは後期に時期比定したが、その類例を求めることができず今後検討を必要としよう。2は中期末葉の南福寺式に属する可能性がある。文様は半截竹管によるものである。

3～7はいずれも口縁部を肥厚させ、そこに文様が施される。5は2条の直線文により低い突帯がつくり出され、そこに刻目を施す。6は爪、7は爪状原体による爪形文である。

8・9は市来式土器であり、いずれも貝殻腹縁による押圧文が施される。8の内面には貝殻条痕文が施される。

10～12は御手洗A式土器である。10は爪状原体、11は半截竹管による爪形文である。11の内面には貝殻条痕文が施される。12は波状口縁の山形部である。

13～25は鐘ヶ崎式もしくはその系統に属するものと考えられる。13・15・16は内・外とも磨研され黒褐色を呈する。14・17・20・24・25は磨消縄文である。18は凹線文と口縁部端面に浅い押圧文を施す。19は渦巻文である。22・23は摩滅が著しく、器面の状態は不明である。

26は三万田式土器と考えられる。太い凹線文を2条施し、そこにつまみ状浮文を貼り付ける。

27～30は型式名が不明であるが、形態・文様構成から後期のものと考えられる。27は磨研され黒褐色を呈する。30は波状口縁の山形部で、内面には不定形の沈線文が施される。

中期土器（図32上）

量的には少なく、すべて阿高式土器である。粒径の大きい滑石を含み、色調は淡赤褐色を呈する。1～3は口縁部、4・5は底部である。なお、底部に鰐の脊椎骨压痕をもつものは認められない。

前期土器（図32下～36）

本遺跡において曾畠式土器は、第8・9トレンチV層下部をはじめ、各トレンチの攪乱層中より相当量の出土をみた。大部分はその胎土内に滑石を含み、幾何学文様が施されたものである。ここでは第9トレンチV層下部より出土した土器で、とくに完形品ちかくまで復原でき、しかも還存状態

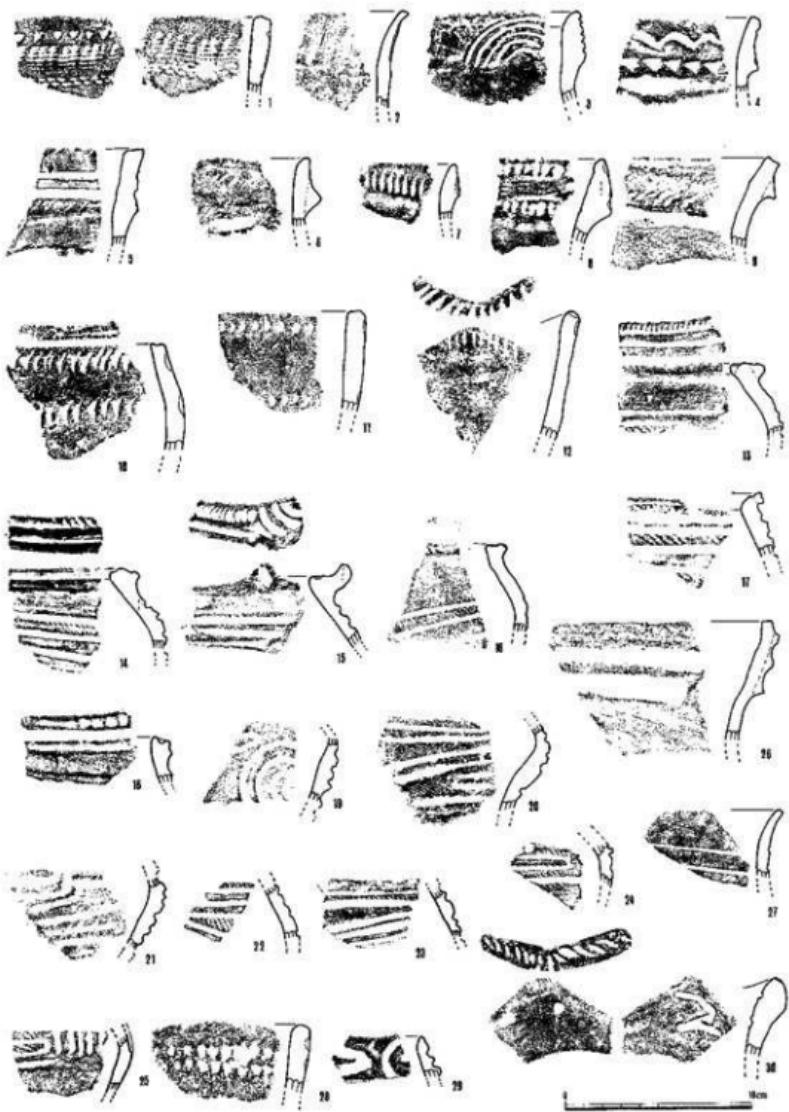


圖30 繩文後期七器折影

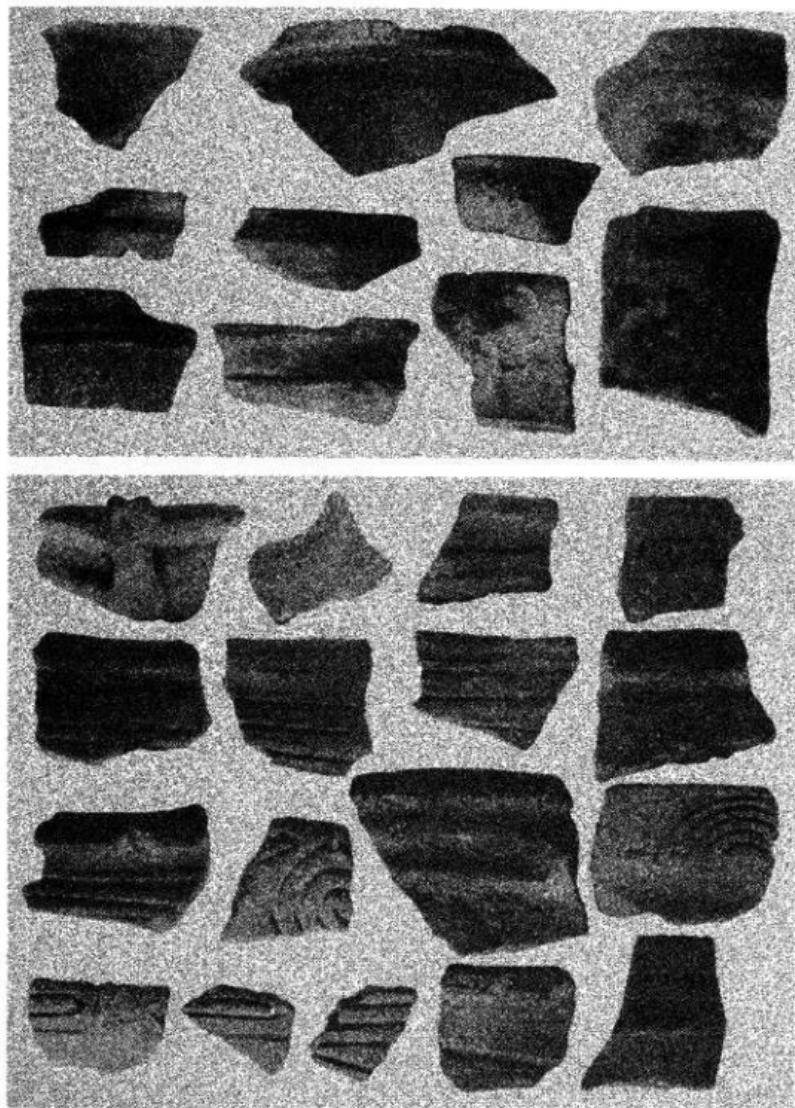


図31 純文晩期土器（上）、後期土器（下）

1/2

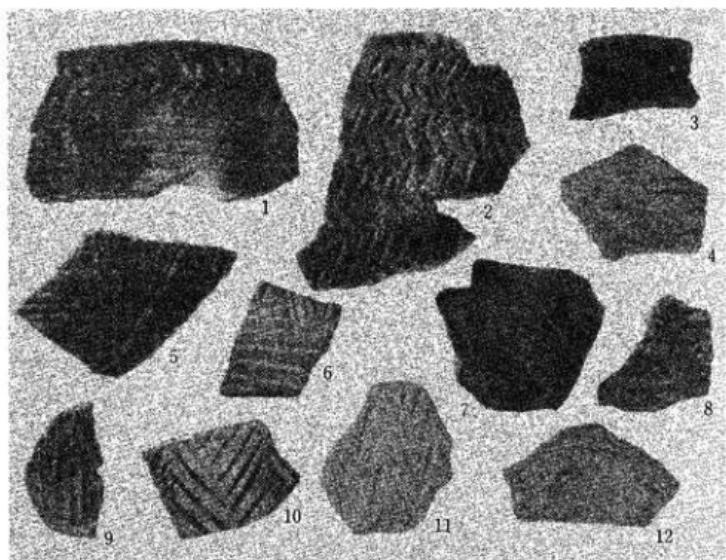
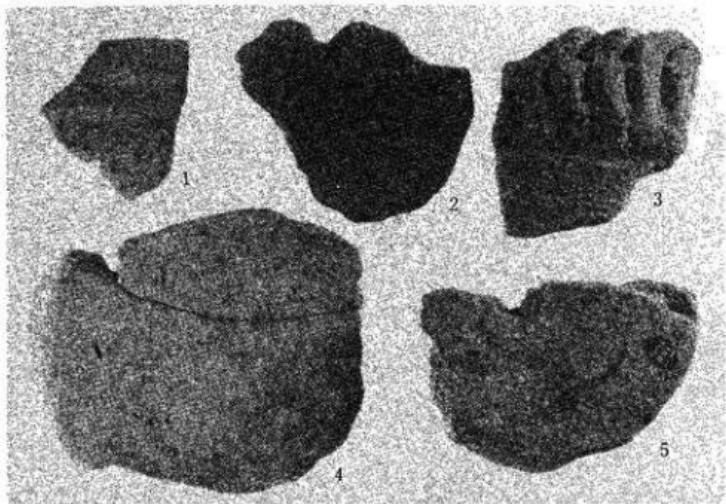


図32 阿高式土器(上), 曾烟式土器(下)

1/2

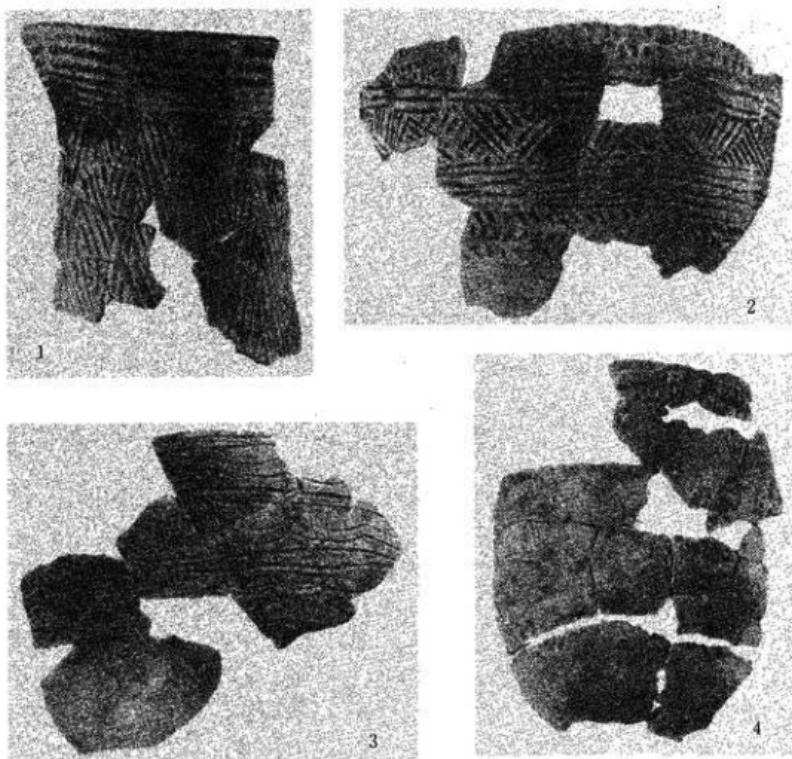


図33 曽畠式土器 (1, 2, 4 : 第9トレンチV層下部, 3 : 第8トレンチV層下部) 約1/4

が良好なものを固化し説明を加える。

図34は復原口径32cm、復原高19cm、口縁部が直口する浅鉢である。外面調整はナデであり、それは文様の施文部以下は、施文部に比べて調整が粗く、砂粒が器面に残る。内面調整は板状原体によるケズリである。底部付近ではケズリの方向が異なり、口縁部付近ではその

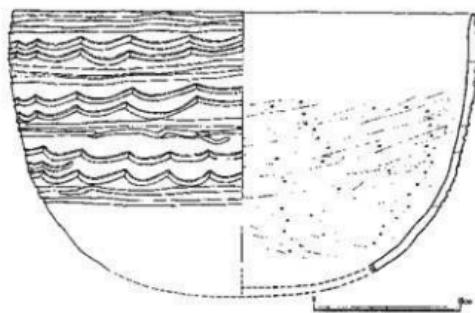


図34 曽畠式土器 (第8トレンチV層下部)

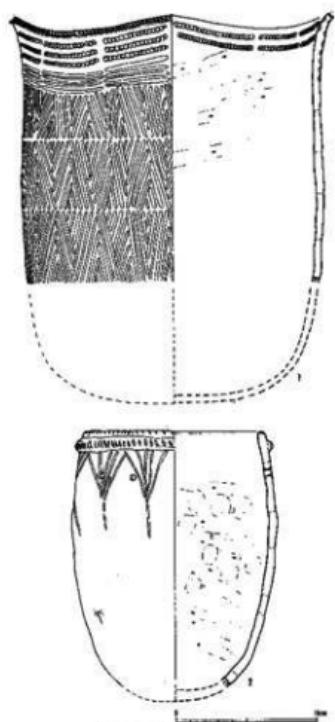


図35 曽煙式土器
(第9トレンチV層下部)

ケズリをナデ消す。文様は並行直線文→並行連弧文の順で、前者は先端が丸い原体、後者は半截竹管状の原体によって施され、施文原体の使い分けが窺える。胎土には滑石を含み、内・外面には煤が付着する。色調は暗灰色を呈する。

図35の1は復原口径23cm、復原高28cmで、口縁部がやや外反し波状口縁を呈する深鉢である。外面調整はナデが、内面調整は板状原体によるケズリが施され、その後やや粗くそれをナデ消す。文様は口縁部端面に、先端が丸い原体により押引文状に刺突文が施される。外面には、口縁部直下の第1文様帯に竹管状原体による3条の押引文状刺突文、第2文様帯には先端が丸い原体による4条の直線文、第3～5文様帯には第2文様帯と同様の原体による構成の粗い複合鋸歯文が施される。なお、第2文様帯は第3文様帯を切って施される。内面の口縁部直下には、竹管状の原体による2条の押引文状の刺突文が施される。胎土には滑石を含み、内・外面には煤が付着する。色調は灰褐色を呈する。

2は復原口径13cm、復原高19cmで、口縁部はやや内傾し胸部が若干張る、投弾形を呈する深鉢である。口縁端部には刻目を施し、口縁部直下には断面カマボコ形の突帯を貼り付け、その上に刻目を施す。貼付突帯

から胸部中央にかけ熊手状の浅い沈線文を施し、焼成後2か所に穿孔を施す。この穿孔は土器の破損状況から補修孔と考えられる。外面調整は貝殻条痕文の後にナデが施される。このナデは粗く、器面は凹凸が著しい。内面調整は部分的に板状原体の移動の痕跡が窺えるが、ナデもしくは指押サエによりそれを消す。胎土は良質であるが、滑石は全く含まれない。内・外面には煤が付着し、色調は暗茶褐色を呈する。この土器は口縁部直下の貼付突帯や器面調整や滑石を含まないことがから、いわゆる「野口、阿多タイプ」¹⁹⁸⁰の系統に属すると考える向きもある。しかし、器形や文様構成にその類例を求めることができず、今後類例の増加を待つてさらに検討をおこないたい。

曾煙式土器拓影(図36)

ここでは文様構成のバイエイションを重視し、各トレンチ、各層出土の曾煙式土器をかかげることにする。胎土にはすべて滑石が含まれており、多くは内・外面に煤が付着する。外面調整はナデ、内面調整はナデ・板状原体によるケズリ・貝殻条痕文が普遍的である。

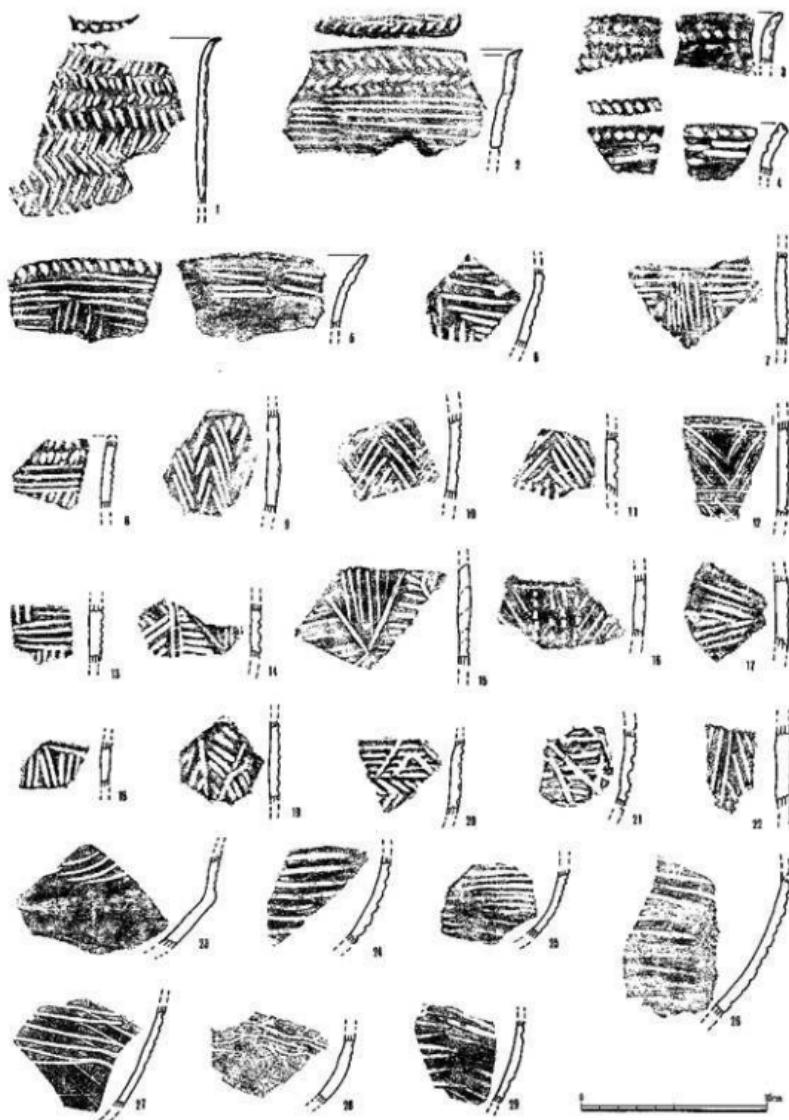


図36 曾畠式土器拓影（各トレンチ出土）

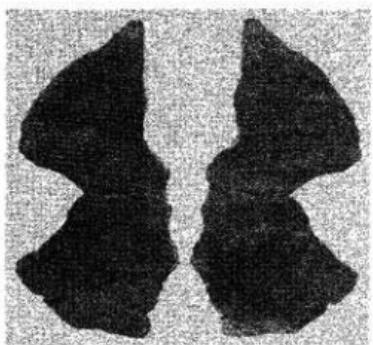


図37 蟲式系土器
(右:底, 左:口, 第9トレンチVI層)

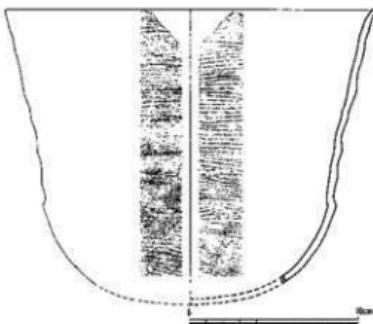


図38 蟲式系土器 (第9トレンチVI層)

早期末土器 (図37・38)

第9トレンチVI層より、蟲式系七器が出土した。復原口径22cm、復原高18cmで、胴部下半から口縁部まで外傾し、胴部下半にやや強い屈曲を有する。内外の器面調整には貝殻腹縁による条痕文が施される。外面にはこの貝殻腹縁による突帶状の隆起線部がつくり出されるが、いわゆる「ミミズ張れ」状の突帶ほど明瞭でない。胎土に雲母と0.5~1mm大の砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈する。器面調整、胴部下半の屈曲、不明瞭な突帶状の隆起線部から、蟲式系統の土器と考えられ、その類例は鹿児島県出水市在貝塚¹¹⁾に求めることができる。

1~5・8は口縁部である。1を除き口縁直下の第1文様帯は刺突文、第2文様帯は横位の直線文という一定した文様構成をみせている。刺突文の施文原体には、先端が丸いものと竹管状のものとの2種が認められる。5~7は雷文状の文様である。5をはじめ6・7も第3文様帯を構成するものであろう。9~22は胴部に施された各種の文様である。9~11は羽状文である。23~29は底部付近の文様である。24~29は比較的粗雑な横位の直線文のみにより文様が構成される。23は屈曲し、重強文を有し、色調は淡黄灰色を呈する。器形・文様構成とも特異で、ここにあげた曾煙式土器とは別系統に属する可能性がある。ただ器形に関しては、長崎県福江市江湖貝塚や福岡県久留米市野口遺跡¹⁰⁾に類例が知られる。

本遺跡において出土した曾煙式土器は、①口縁部直下の第1・第2文様帯における文様構成、②底部付近における文様構成、の2点に関して、およそ共通の特色をもつ。したがって、上記の曾煙式土器は同一型式内に収まり、それはさらに、曾煙式期における本遺跡の特徴と考えられよう。しかし、今回の調査ではその対象となる土器が少ないので、次回の調査を待ってさらに深く検討してゆきたい。

(4) 石器類

第6, 7トレンチを除き、多量の石器が検出された。石鏃、つまみ形石器、石匙、削器、尖頭器、敲石、凹石、石斧(磨製、打製)、環状石器、異形石器、碇石、十字形石器、石錘、双角状石器、石

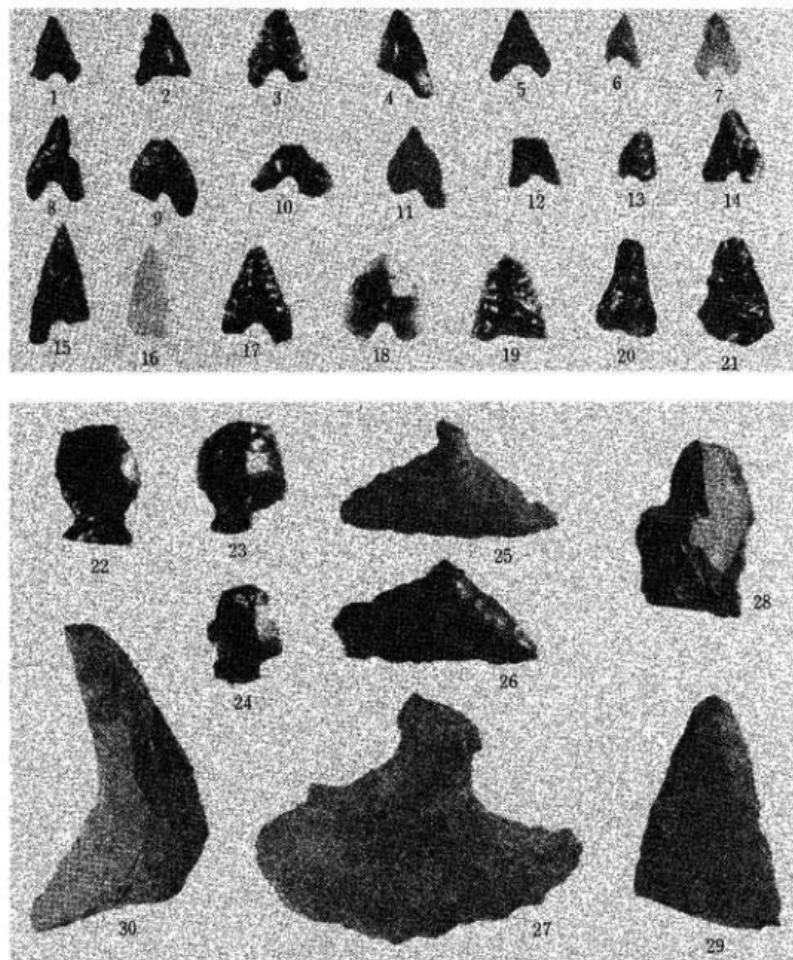


図39 石鏃 (1~21), つまみ形石器 (22~24), 石匙 (25~27), 削器 (28),
尖頭器 (29), 双角状石器 (30)

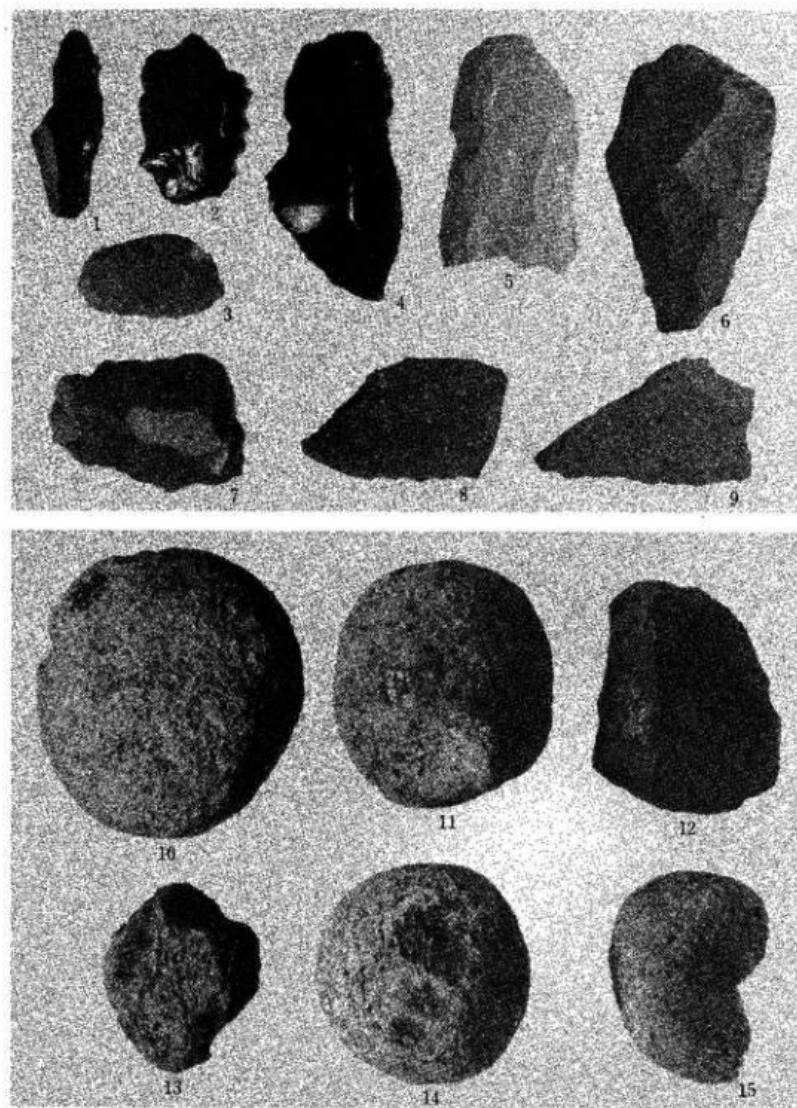


図40 削器(1~9), 敲石(10~14), 凹石(15)

1/2

核、剥片等がある。

これらのほとんどは、繩文、弥生土器、中世の遺物を混在する層中から出土したものであり、所

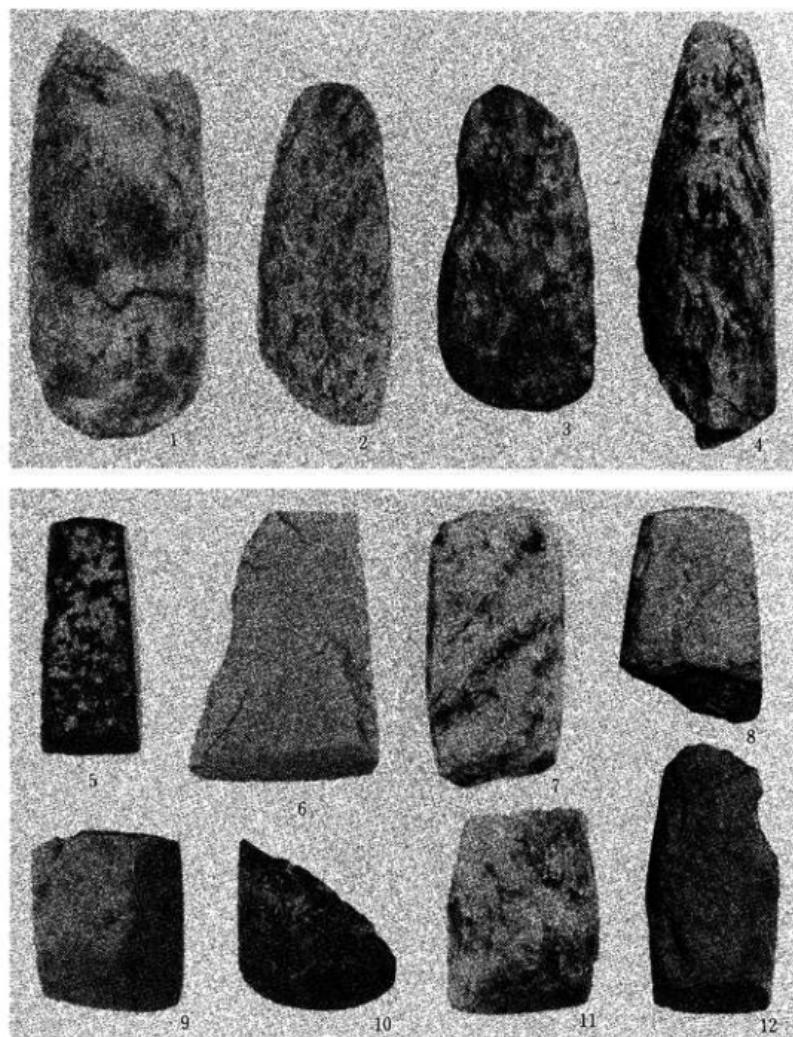


図41 磨製石斧（各トレンチ出土）

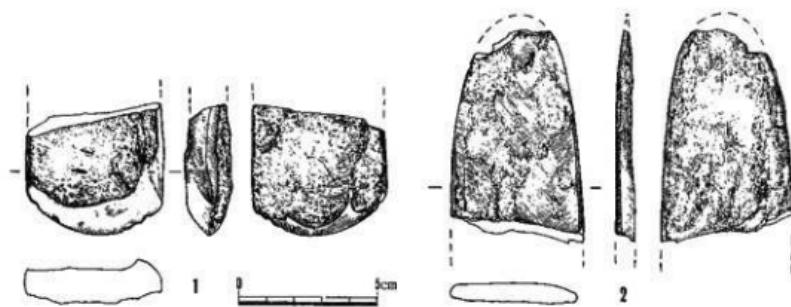


図42 磨製石斧（第9トレンチV層下部）

属時期を明らかにしえないが、他の遺跡での縄文土器との併出状況から、大部分は縄文時代に属するものかと思われる。

石鏃（図39） すべて無茎鏃に分類される。そのなかでも平面形態から凹基無茎鏃とされるものがほとんどである。両面とも全面にわたって調整を施したもの、縁辺のみに調整を施したもの（剝片鏃）とがある。石材は、7がチャートである以外は、すべて黒曜石である。

つまみ形石器（図39） 打面、主要剥離面をそのまま残し、縁辺部には細かい剥離痕をとどめる。下端は3点とも折断され、両面からの細かい剥離によってつまみ部を形成する。石材は、黒曜石である。

石匙（図39） つまみ状の突起をもつ横型石匙である。両面からの剥離によりつまみ部を作り出す。27は片面からの調整剥離によって刃部を形成するが、25・26は両面からの剥離によって直線的な刃部を作り出す。石材は、25・26が黒曜石、27が安山岩である。

削器（図39・40） すべて剝片を素材とし、2辺以上に細かい調整剥離によって刃部を形成した石器である。なお、1・4・5・6・8・9は裏面に主要剥離面を残す。石材は、1・2・4が黒曜石、3・5・6・7・8・9が安山岩である。

尖頭器（図39の29） 先端部のみ残存。全体の形状は不明だが、残存部分の形態、調整加工、厚さ等から尖頭器とした。縁辺には細かい剥離痕をとどめる。石材は、安山岩である。



図43 環状石器
(第9トレンチII層、上下13.1cm)



図44 異形石器
(第3トレンチII層、上下8.0cm)

敲石（図40） 形態および敲打痕の部位により、いくつかに分類が可能である。ほぼ円形で、表裏面中央と周縁部に敲打痕をもつもの（10・11）と、表裏面ほぼ中央に敲打痕をもつもの（14）、平面楕円形で長軸の両端に敲打痕をもつものがある。安山岩を盛用。

凹石（図40） 欠損品である。表裏両面ともほぼ中央に径2cm、深さ7mmの皿状の凹部を有する。石材は、安山岩である。

磨製石斧（図41） 完存するものは少なく、ほとんどが欠損品である。したがって、全形を知りうる資料に欠けるが、残存部分の形態により、いくつかに分類が可能である。大きさ、基部の断面形態、および刃部形態から、大形で断面楕円形の基部を有するもの（1・2）、大形で断面扁平な基部を有するもの（3）、大形で断面形態は円形に近く、乳棒状を呈するもの（4）がある。また小形の石斧としては、断面が扁平な長方形を呈する基部をもち、片刃であるもの（5・6・7・9・11・12）と、断面は扁平で両刃をもつもの（10）などがある。石材は1～4が蛇紋岩、5・9は頁岩、6は砂岩、7・10・11は蛇紋岩である。図42は第9トレンチV層下部出土の磨製石斧である。1・2ともに欠損しており、1は円刃、両凸刃をもち、使用時の線状痕が確認される。石材は、両例とも千枚岩である。

環状石器（図43） 半欠品である。径13cm、孔径2.3cmを測り、全面を敲打によって成形する。縁辺部には刃部をみず、まるみを呈する。石材は、軟質の安山岩である。

異形石器（図44） 表裏面ともに調整剝離を施す。くびれ部、および縁辺部には剥離痕をとどめる。石材は、流紋岩である。

碇石（図45） 概して扁平な結晶片岩、安山岩の礫を用い、粗い打ち欠きによって長脚辺のほぼ中央に抉りを施した重量のある石器である。ほかに、抉り部を結ぶように、両面にわたって溝をめぐらすものもある。なお、今回の調査では28個出土した。重量は4～13.5kg。

十字形石器（図46上） いずれも欠損品であり、完存する例はない。緑色片岩を用い、表裏、側面ともに研磨したもの（5・8）以外は、成形剝離痕をそのまま残すものが多い。石材は、結晶片岩、緑色片岩を用いる。

石錘（図46下） 扁平礫を用いた石錘であり、長軸の両端に打撃を加えて抉りを入れるもの（9・10・11・13・14・15）と、短軸側に抉りを施すもの（12・16）とに分類される。粒状の安山岩を盛用し、まれに結晶片岩製のものもある。

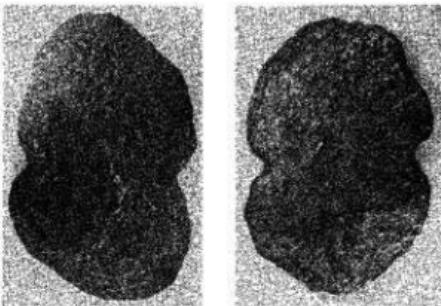


図45 碇石
(第8トレンチV層上部、左：上34.5cm、右：上下33.2cm)

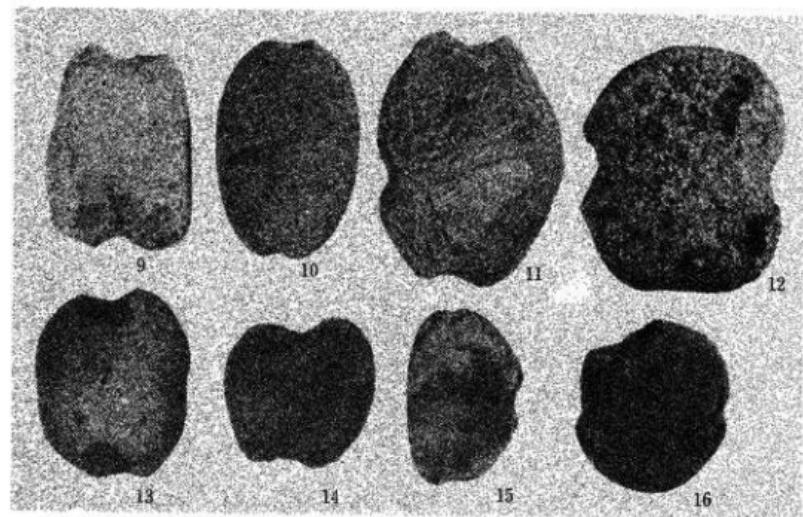
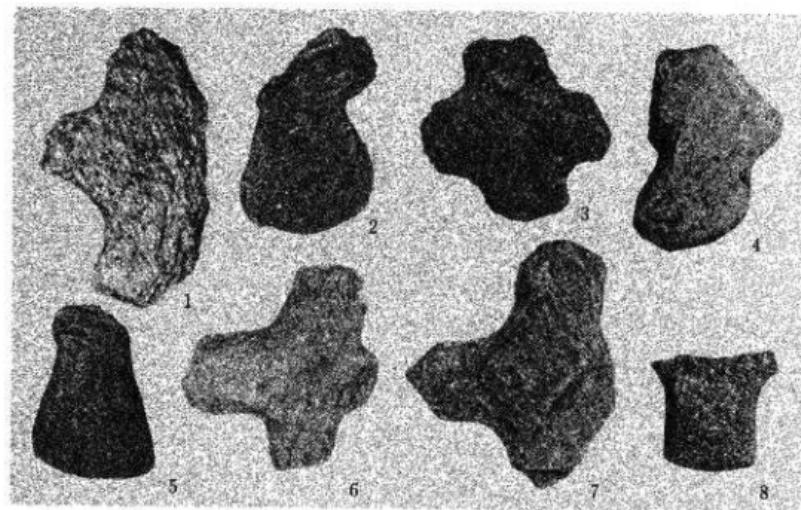


図46 十字形石器(上), 石錺(下)

1/2

(5) 土製円盤(図47)

本遺跡からは土器片利用の土製円盤が2点出土した。

1は第8トレンチII層から出土し、曾畠式土器の洞部破片を転用している。直径は約5cm、厚さ0.5~0.6cmで、中心に径0.6cmの孔を焼成後に穿つ。色調は暗褐色で、径0.5~0.6mmの滑石片を多く含み、本遺跡に通有な曾畠式土器片である。外面は全面に複合鋸歯文を有し、炭化物が付着している。

2は第9トレンチV層上部から出土したもので、縄文土器片を再利用している。復原径約5cm、厚さ0.8cmで全体の約5分の3を残す。色調は外面が赤褐色、内・断面が暗褐色を呈し、径1mm大の長石・石英粒等を含む。外面には2本の弦線文で縄文を画しており、縄文時代後期の土器片を再利用したものと思われる。

(6) 貝類・貝輪(図48・49)

今回の調査において、第3・8・9トレンチから混貝上層(V層)が検出された。ここで解説を行う貝類の大部分は同層出土のものである。同層の広がりは、第3トレンチ北東部から第9トレンチを経て第8トレンチ東南部におよび、さらに東側へ延びるものと推定される。また、層厚は20~40cmを測るが、包含する貝の分布には特に集中する傾向はない。

検出された貝の種類は、不明種(未同定)を除くと34種にのぼる(表1)。これらを棲息環境別に分けると、シラオガイ(マルスダレガイ科)をはじめとする砂泥性貝類と、スガイ(リュウテンガイ科)をはじめとする岩礁性貝類に分けられる。両者の量的な比率はそれぞれ63:37になるが、このうちシラオガイは全体の40.5%を占め、当遺跡の特徴を示すものと言えよう。

また、一部の貝には小孔あるいは打ち欠きが認められた。このうち自然的な要因によるものとしては、多量に出上したシラオガイおよびケマンガイ(マルスダレガイ科)の一部の殻頂部付近に、径3~5mmの円孔が外側から穿たれている。これは他般に穿孔して肉食する生態をもつツメタガイ(タマガイ科)によるものである。また、マガキ(イタボガキ科)のなかには、外面にサンゴを付着するものがある。一方、人為的なものとしてはアカニシ(アクキガイ科)の殻に、橢円形状の打ち欠きが認められた。その長径は3.2cm、短径1.4cmを測る。

貝類の堆積成因については、シラオガイに見られるように口を閉じた状態での出土状況を見せる一方で、棲息環境の異なる貝が共存すること、貝の種類の豊富さなどから、自然堆積と人為的なものが複合している状況を看取しができそうである。さらに、マガキに付着したサンゴや貝の組成などから、遺跡形成当時の古環境を復原していくことも可能になるものと思われる。

図49は、第9トレンチV層下部から出土した貝輪である。半分強を欠損し、弾丸部を含む部分が残されている。二枚貝を削り抜いたのち全面を入念に磨きあげている。なお、外面に装飾を施した痕跡はない。形状は正円を呈するものと推定され、残存部での厚さは0.4cm、幅は1.2cm、推定



図47 土製品(1第8トレンチII層、
2第9トレンチV層上部)

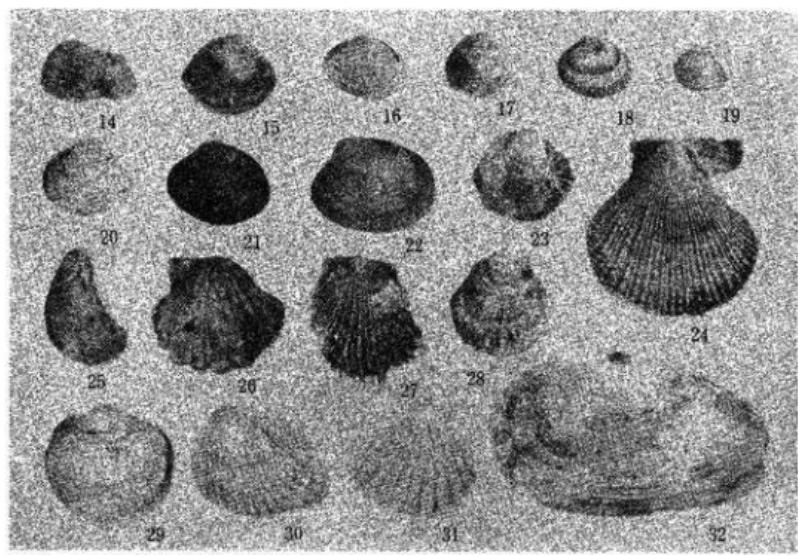
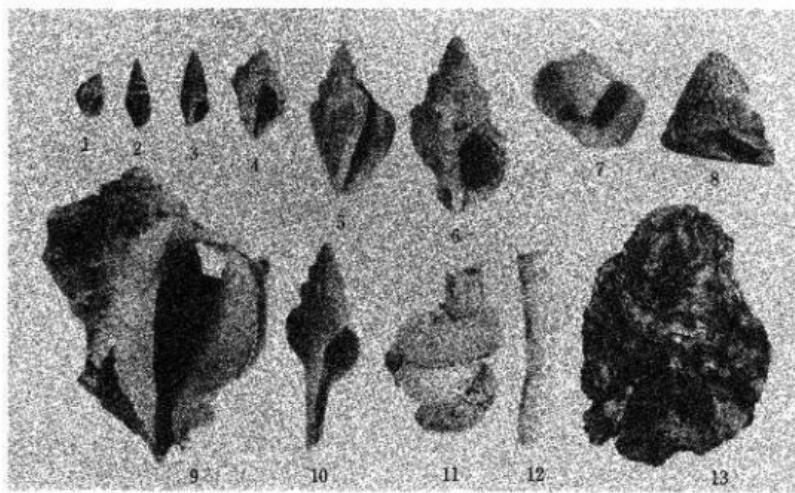


圖48 貝類

1/2

種名	%	図48の番号
ムシロガイ	0.7	1
ウミニナ	2.8	2・3
クリフレイシガイ	0.9	4・6
シドロガイ	0.2	5
ツメタガイ	3.0	7
オオコシングカガンガラ	1.8	8
アカニシ	1.8	9
コナガニシ	0.6	10
オオヘビガイ	2.7	11
フナクイムシ	2.2	12
マガキ	1.0	13
カリガネエガイ	1.2	14
ケマンガイ	0.9	15・21
ヒメシラトリガイ	2.2	16
イオウハマグリ	0.3	17
オニアサリ	0.2	18
シオヤガイ	0.7	19
シラオガイ	40.5	20
アサリ	1.0	22
キクザルガイ	5.8	23
アカザラガイ	6.4	24
ケガイ	0.5	25
イタヤガイ	0.3	26
チリボタンガイ	1.6	27・28
イセシラガイ	8.5	29
ヒメアカガイ	0.5	30
ハイガイ	0.6	31
オオノガイ	0.3	32
イヨスダレ	0.2	
シオフキ	0.2	
ナミマガシワガイ	0.6	
ワシノハガイ	0.3	
サザエ	1.0	
スガイ	5.2	
不明	3.3	

表1 売類組成表(純数672点)

から大・小形のモモ・アブラギリ, IV層からスダジイ・クロマツ・アブラギリ, V層上部からクルミの出土をみた。なお、クルミの出土量はいたって少ない。

食用とされる植物は、モモ・クルミ・スダジイなどである。種子のなかでとくに注目されるのは多量に出土したチャンチンモドキである。これは食用植物の一類と考えられ、縄文時代の食生活を復原するうえで今後問題となるものである。現在、中国南部からタイ・ヒマラヤにかけて、また日本でも九州南部(熊本・鹿児島県)に分布し¹²⁾、自生・伝播の問題を含めて植物学上大いに注目されている。出土例としては、佐賀県有田町坂の下遺跡¹³⁾で知られており、縄文時代中期の貯蔵穴とみられる遺構から出土している。本遺跡では第3・8・9トレンチのIV・V層上部(攪乱層)から集中して出土したが、普通式土器の単純層とみられるV層下部からも少量の出土が認められた。

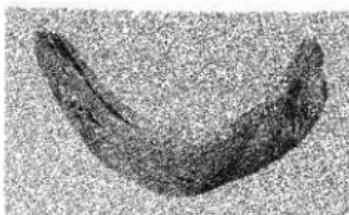


図49 貝輪(第9トレンチV層下部)1/1

内径は4.5cmである。この貝輪は本年度調査において本遺跡から出土した唯一の貝製品である。

(7) 植物遺存体(図50)

今回の調査において、北端の第6・7トレンチを除くすべてのトレンチから種子・流木・加工木等が出土した。このうち種子については、とくに第3・8・9トレンチのIV・V層上部に集中する傾向がみられた。また、流木もほぼ同様な状況が認められたが、比較的大形の流木については第3トレンチのIV層からV層上部にかけて出土した。加工木のうち、中世以降のものと考えられる木枕を除いて、時期を特定しうるものは検出されなかった。

植物種子のうち、チャンチンモドキ以外はほとんど第3トレンチに集中する。I層からハス、II層からツバキ・イスノキ・ナンキンハゼ・III層

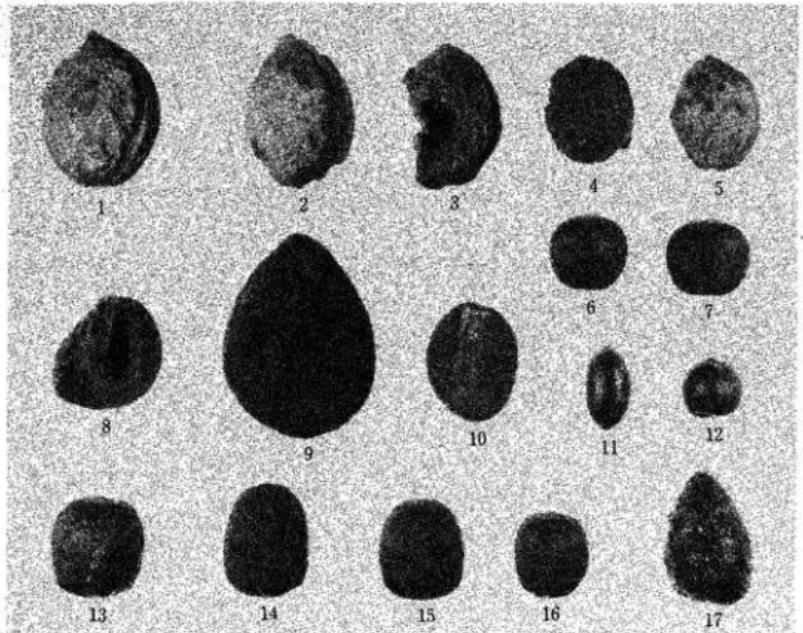


図50 植物遺存体 (1~5 モモ〈バラ科〉, 6~7 アブラギリ〈トウダイグサ科〉,
8 クルミ〈クルミ科〉, 9 イスノキ (インジェクト・ゴール), 10 ツバキ
〈ツバキ科〉, 11 ハス (スイレン科), 12 スダイジ (ブナ科)
13~16 チャンテンモドキ (ウルシ科), 17 クロマツ (マツ科))

1/1

〔付篇 I〕熊野神社遺跡出土の動物遺存体について

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 松井 章

本遺跡から出土した動物遺存体は1cm以下の細片をのぞくと623点で、哺乳類が615点、鳥類が1点、魚類が7点と哺乳類が99%と圧倒的な量を占める。それらは主に第3・8・9トレンチの緑灰色砂質土、黒褐色砂質土、混貝土層から出土したもので、なかでも緑灰色砂質土層からの出土が最も多い。遺物は旧汀線に堆積したようであるが、骨の表面には風化や水の作用で摩耗した痕跡は見られず、保存状態は非常によい。現在までにすべての骨を観察、検討したが、ニホンジカとイノシシに相当する大きさの椎骨や四肢骨破片の骨端部を欠くものについては、まだ同定作業をおこなっていない。また、肋骨については今後共、形態的特徴から種を同定できる見通しはもっていない。なお、全出土破片数に対するそれぞれの破片数の比率は、椎骨片5%(56点)、種不明の四肢骨のうち、大腿骨などの部位のわかるものが2%(10点)、部位の判明もできないものが14%(90点)、肋骨片は14%(85点)を占め、その他のものも含めて同定できなかった破片数は45%(278点)を占める。以下に判明した種ごとに概要を述べたい。

イノシシ

Sus scrofa leucomystax Temminck

最多の出土量を示し、骨片数では214点を数え、全破片数の34%を占める。歯牙から見ると第3大臼歯の萌出中のものが多い。四肢骨の骨端部からみても、大腿骨遠位端の癒着の終了したものが17点中3例のみと少ない。脛骨近位端についても癒着の終了したものは10点中1点のみ、上

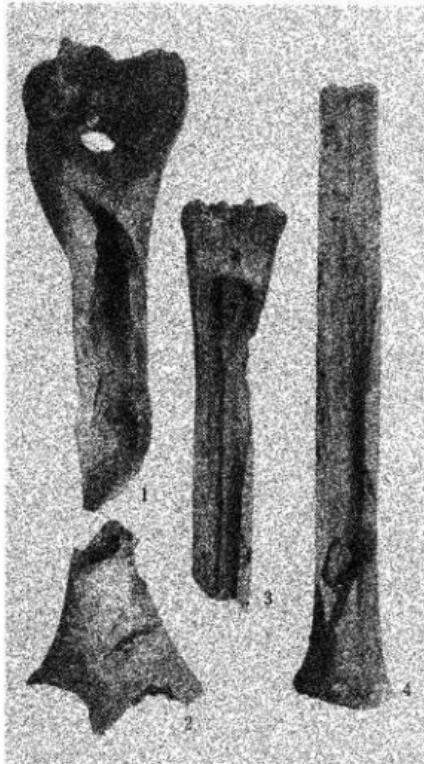


図1 獣骨

(1 イノシシ上腕骨遠位端、2 切痕のある獸骨、
3・4 シカ中手・中足骨)

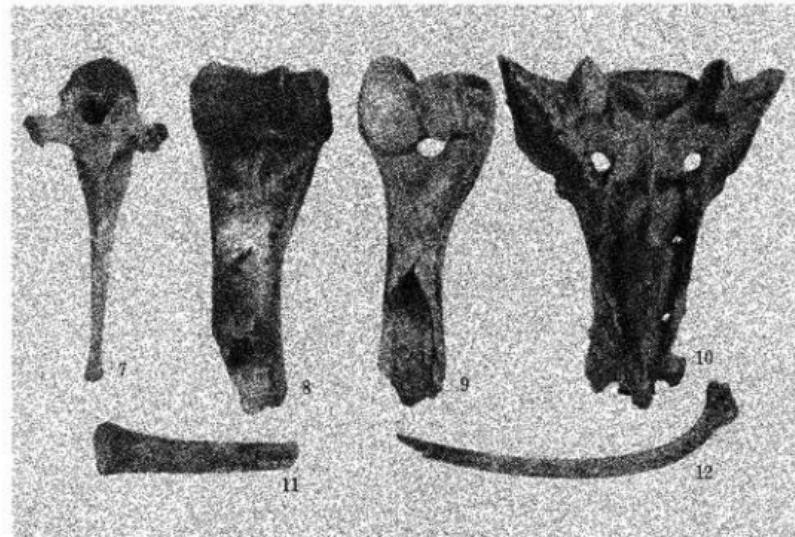
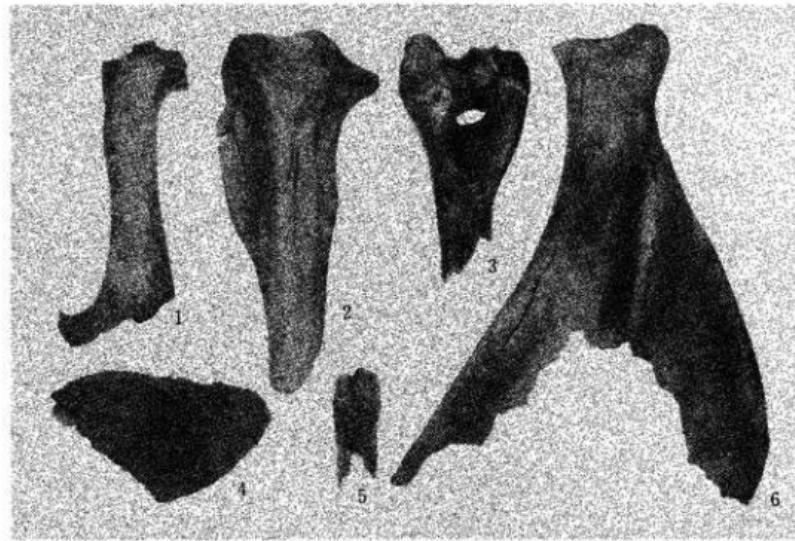


図2 獣骨 (1~7・9~12イノシシ, 8シカ)

1/2

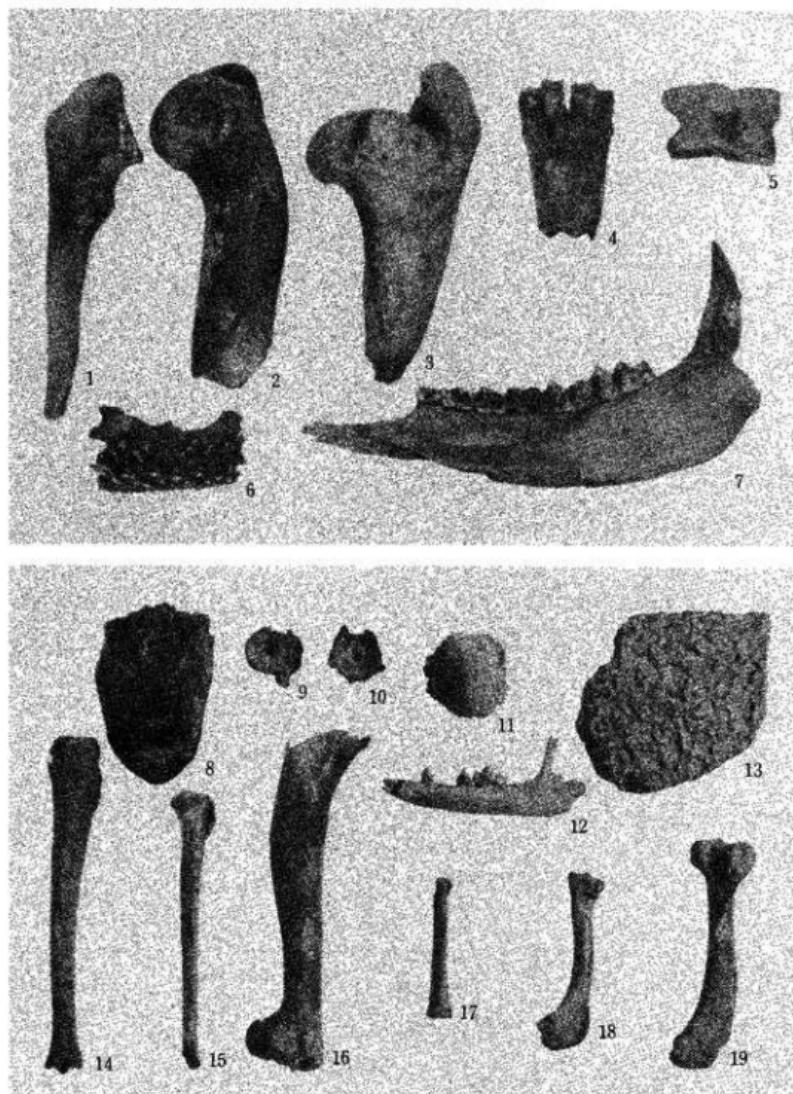


図3 獣骨・魚骨・鳥骨類 (1~7シカ, 8~10タイ類, 11~12タスキ, 13クジラ, 14~17イヌ, 15ウサギ,
16不明, 18キジ, 19アナグマ)

1/2

腕骨遠位端についてみると、8点中7点が癒着を終了している。このことから本遺跡で出土したイノシシは上腕骨遠位端が癒着を終了してから、大腿骨遠位端、脛骨近位端が癒着を終了するまでの間、すなわち、コーンウォール (Cornwall I. W. 1956 "Bones for the Archaeologist" Dent London) による骨端部癒着の年齢推定のデータによると1.5歳から3.5歳までの個体が最も多く獲られていたことになる。

ニホンジカ

Cervus nippon Temminck

同定できた破片は102点で全体の破片数の30%にある。部位別にみて頭骨破片の少ないことが目につく。頭骨片と四肢骨片の比はシカでは7:82であるのに対

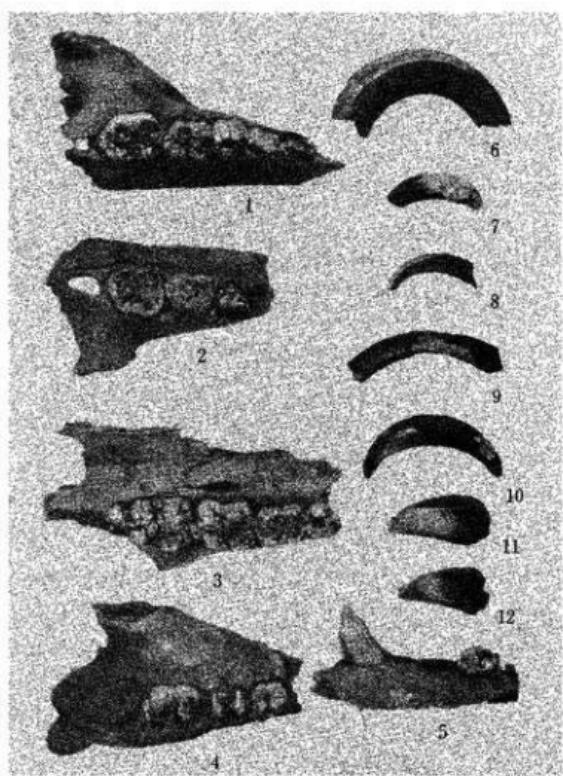


図4 頭骨・牙 (イノシシ)

1/2

し、イノシシでは49:114と大きな差がある。とくに骨角器の素材となることが多い鹿角が全く出土していないことは、頭骨の出土と関連がありそうである。鹿角と並んで骨角器の素材として多用される中手骨、中足骨の場合は細片が9点出土しているし、それらの部位を用いた骨角器も出土している。本遺跡に居住した人々がシカの頭部を入手できない立場にあったか、遺跡の別の場所に棄てられたかのいずれかである。成長度についてみれば、上腕骨遠位端の癒着の終了したものは6点中4点、大腿骨遠位端についてみれば、8点中1点とイノシシでみた年令構成の傾向に近い。

イヌ *Canis familiaris* Linnaeus

四肢骨片7点、頭骨片1点、下顎第1大臼歯1点が出土している。いずれも単独で出土し、四肢骨はすべて火熱を受けていることから、イヌもまた食用に供されたことは明らかである。

ヒト *Homo sapience*

左距骨が1点、第3トレンチの黒褐色粘砂質土から出土している。成人のもので縁辺が少しづつ欠けている。火熱を受けた痕跡は明らかでない。

その他の動物

タヌキ (*Nyctereutes procyonoides* Gray) 左下顎骨、頭骨片の6点、ウサギ (*Lepus brachyrhinos* Temminck) 脊骨、大腿骨など3点、クジラ類(*Cetacea*)の椎間板片2点、アナグマ (*Meles anakuma* Temminck) 右上腕骨1点などがあり、火熱を受けているものが多い。

鳥類

キジ (*Phasianus colchicus* Vieillot) の右上腕骨が1点完形で出土している。他には破片もみられない。

魚類

タイ類の前頭骨6点、椎骨1点が出土している。種の同定はできなかった。

両生類

ヒキガエル相当の大きさの上腕骨が1点出土している。

骨製ヤス (図5)

シカの中手骨、または中足骨の体部の側面を利用して斜めからの粗い磨きにより整形して尖らせている。裏面には骨の内部の髓の入っていた部分の凹みが残る。全長8.2cm。唯一の骨角器である。第9トレンチV層下部出土。

まとめ

本遺跡出土の動物遺存体はイノシシ、ニホンジカを主体とする哺乳類が99%を占め、その他の種は少ない。保存状態は良好であるので、小形の骨だけが消滅したとは考えられず、元来この地点に、捨てられた骨が少なかったと言えよう。火熱を受けた骨が多いこともこの遺跡の特徴である。イノシシでは44%、ニホンジカでは67%が火熱により黒変している。解体に際し腱や筋肉の除去のために骨の表面につけられた切痕も全体の18%に見られる。個体数その他の問題については本報告にゆずりたい。

追 ヒトについては長崎大学医学部内藤芳鶴先生の御教示を得た。

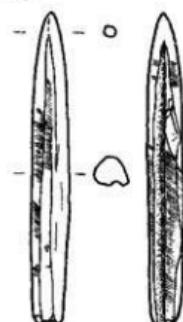


図5 骨製ヤス 2/3

[付篇II] 液体シンチレーション法による熊野神社遺跡の ¹⁴C 年代について

京都産業大学理学部

山田 治・小橋川 明

1 試料について

1984年9月20日に同志社大学考古学研究室・松藤和人講師より熊野神社遺跡から出土した貝と木炭の試料について¹⁴C年代測定の御依頼を受けましたので、直ちに測定作業にとりかかり、約3か月後に次に記すような測定結果を得ました。

試料は第9トレンチ貝層下底の貝150gと、貝層中の木炭約40gで、地表下約2mから得られたもので、1984年9月6日採取のものであります。

出土品よりこの貝層は纏文時代前期と推定されているようであります。

2 測定結果

測定番号	試料名	測定結果
KSU-886	貝	5440±35 B. P.
KSU-887	木炭	4780±35 B. P.

註 國際的約束により上記の結果は以下の表現法が用いられています。

- (1) ¹⁴Cの半減期は5568年を用いる。
- (2) B. P. の意味は元来 Before Presentであるが、Presentが毎年移動しては困るのでAD1950年を0とし、それ以前の年数を示す。
- (3) 頗差は統計的誤差で標準偏差を用いる。この中に真の値の入る確率は68%である。

3 ¹⁴C年代測定について

生きている動植物中には僅かながら放射性炭素¹⁴Cが含まれています。¹⁴Cは地球の大気の上層部で宇宙線によって作られ、炭酸ガスの形でゆっくり地上に降りて来ます。空気中の炭酸ガスの割合が一定で、¹⁴Cの作られる速さが一定なら、空気中の¹⁴C濃度は一定であるはずです。植物は炭素同化作用で炭素といっしょに¹⁴Cをも吸収して植物体を作ります。動物も植物を食べて成長しますから、生物はみな一定の濃度の¹⁴Cを含んでいます。ところが生物が枯死すると¹⁴Cの吸収は止まるので、体内の¹⁴Cは半減期5730年の割合でしだいに減少します。古代の動植物中の¹⁴C濃度を測定できれば遺跡の年代もわかることになります。

ごく厳密なことを言うと、¹⁴C濃度は時代により僅かに変化しましたので、¹⁴C年代と絶対年代が少しずれている時代もありますが、今から約7000年前までについては古い大木の年輪年代と¹⁴C年代の比較ができるので20年程度のゆらぎを許せば完全な絶対年代が得られます。それ以前については¹⁴C年代を絶対年代のよい近似値と考えればよいでしょう。

¹⁴C濃度は非常に小さく、普通の炭素の一兆分の1くらいしかありませんので、更にその1000分の1以下になると現在の測定技術では測れなくなります。その限界は約6万年です。

どんなに頑張っても10万年まで延長はできないでしょう。

4 液体シンチレーション法とは

最初1956年に Libby が¹⁴C測定をしたときには固体粉沫法を用いました。その後ずっと気体計数法が用いられています。1960年代から液体シンチレーション法が出現してきました。これは試料の放射性元素を液体中に溶かし、放射線が出るたびに発光するシンチレーターという物質をもいっしょに溶かしておいて発光回数を数える方法です。むつかしい理論は省略しますが、この方法では放射性物質の絶対測定ができるので、測定結果に統計誤差を越える誤りができることが殆んどありません。試料にさえ問題がなければ、結果を完全に信頼できるものであります。従って考古学者は試料の採取方法にさえ疑問点がなければ、あとは何も苦にすることなくその結果を基にして議論を先へ進めることができます。

V 総 括

昭和57年7月の長崎大水害として知られる集中豪雨は県下各地に甚大な被害をもたらし、多良見町でも隨所で被害をこうむった。その災害復旧工事に伴って偶然発見されたのが本遺跡である。

本遺跡の所在する多良見町は、大村湾の南奥部に位置し、長崎市から東北へ約12kmのところにある。遺跡は風光明媚な大村湾に面した舟津郷に所在し、伊木力川によって形成された沖積平野の西北端、熊野神社の鎮座する舌状丘陵の東麓に立地する。調査地は旧入江状の地形をみせ、標高2m前後を測り、現海岸線まで直線距離にして約200m、伊木力川まで間約120mをかぞえる。

調査は、伊木力小学校の通学道路の新設に伴う遺跡範囲の確認を目的としたもので、道路幅およびその付属施設の建設予定地内に限って試掘調査を実施した。

今回の調査では計9か所の調査坑を設定したところ、程度の差はあるが、すべてのトレンチから遺物の出土をみた。とくに遺物の集中が認められたのは第2・3・8・9の各トレンチで、残余のトレンチからは少量の遺物を検出したにすぎない。それらは、おおかた攪乱層中からの出土を示した。また、第3・8・9トレンチにあっても混貝土層（V層）上部までは攪乱をうけた出土状況をみせ、各期の遺物を混在する。第2トレンチでは疊層（IV層）下部以下が曾畠式土器を単純に包含する。

したがって、原位置もしくはそれに近い出土状態を示すのは、第3・8・9トレンチに分布する混貝土層の下部以下となる。第9トレンチでは、この混貝土層下部において曾畠式土器の大形破片、碇石、石斧、貝輪、獸骨などがほぼ同一レベルで出土し、土器、獸骨にはいくつかのまとまりが観察され、あたかも一括投棄されたような状態を示唆するものであった。

第9トレンチの混貝土層最下部において、丸木舟とみられる大形加工材の出土をみた。この加工材自体、全面に生痕化石をとどめ、混貝土層中からの出土と相まって、旧汀線付近に遭棄されたものの埋没を示すものと思われる。なお、この大形加工材の直上より、搬入石材（結晶片岩）を用いた多量の碇石（長さ22～37cm、重量4～13.5kg）がまとまって出土している事実も注目される。

遺構としては、丘陵裾部に設定した第6トレンチにおいて検出された近世以降に構築された性格不明の石列のほかは、第3トレンチで中世以降に打ち込まれたとみられる木杭が唯一の遺構として指摘されるにすぎない。

調査によって出土した遺物には、縄文土器（早期末・前期・中期・後期・晚期）、弥生土器（中・後期）、土師器、須恵器、中世土器・陶磁器、近世陶磁器、石器類、石鍋、土製品、骨角器、貝輪、加工木等の文化遺物のほか、多量の貝類、獸・魚骨、植物遺存体（種子・球果・流木）等

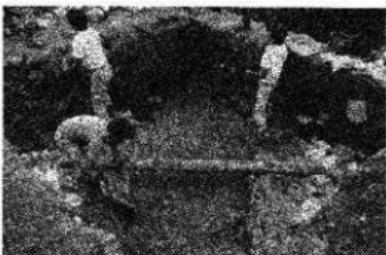


図1 大形加工材埋廻し風景（第9トレンチ、北西から）

の自然遺物がある。文化遺物のなかで量的に主体を占めるのは縄文土器および石器類であり、とくに後者にあっては縄文時代のすべての器種がそろっている感がある。多量の黒曜石、サヌカイト質安山岩、結晶片岩は本遺跡付近には産しないものであり、直接採取か交易によって入手したものであろう。出土遺物によれば、本遺跡が縄文時代から近世に至るまで複合して形成されたことが知られる。

縄文土器については、轟式系、曾畠式、阿高式、市来式、鐘ヶ崎式、御手洗A式、御領式などのほか粗製の条痕文土器等を検出した。なかでも滑石を胎土中に混入する曾畠式土器、後期土器の出土量が多い点が注目され、遺跡形成のピークが縄文時代前・後期にあることが推察される。轟式系、曾畠式土器を除いて、摩滅をうけた小破片が大半であり、包含層の性格を反映している。

弥生土器は、壺・壺・高坏・器台の破片が少量認められるが、いずれも小破片で摩滅が著しい。これらは弥生時代中・後期に属し、前期の土器をみない。

土師器、須恵器はいたって微量であり、多くを語ることができない。

中世の土器（土師質・瓦質）、陶磁器、石鍋も検出されたが、とくに12~13世紀代を中心とした中國産の輸入磁器（白磁、青磁）、瓦質擂鉢、東播系とみられる鉢の存在が注目される。それらは、文献史料を欠く本地方の中世史の研究に寄与するものと考えられる。

自然遺物については、比較的多くの漁網用石錐の出土にもかかわらず、魚骨の検出例が少なく、わずかにタイ類が知られているにすぎない。内湾に面した本遺跡の立地からみて、いささか特異な感じを抱かせるものである。哺乳類ではイノシシ、ニホンジカ、タヌキ、ウサギ、イヌ、アナグマ、クジラ類が認められ、鳥類ではキジがある。

とりわけ、イノシシ、ニホンジカの出土量が多く、重要な食料資源の一つであったことが知られる。それらの多くは破碎、火熱をうけ、食料残滓としての遺存を示している。後者については鹿角の出土をみず、他の部位をふくめて投棄に際しての選択性が看取されそうである。

貝類（斧足・頭足類）は第3・8・9トレチの混貝土層（標高0m前後）を中心に出土した。これまで34種が確認され、砂泥性および岩礁性の貝類が混淆する。なかでもシラオガイ（砂泥性）の比率が高く、ツメタガイによる捕食を示すものが少なくない。これらの貝類は、食料に供されたものと自然堆積に

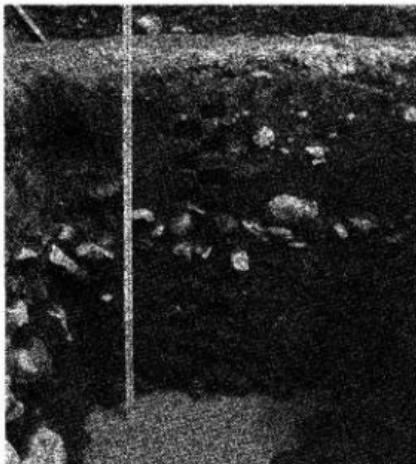


図2 第3トレチ北壁土壤サンプリング

よるものとが複合している可能性が高い。これらは遺跡付近の古環境を窺ううえで重要である。

本遺跡が低湿地に立地し地下水位が高いこととも相まって、各層中から植物遺存体を豊富に出土した。種子、球果では多量のチャンチンモドキをはじめとして、モモ、ツバキ、アブラギリ、ナンキンハゼ、イスノキ、スダジイ、クルミ、ハス、クロマツ等の出土をみた。このうち、混貝土層下部（曾畠式期）からの出土が確認されたのは少量のチャンチンモドキだけである。残余の種子、球果についてはいずれも搅乱層中からの出土であり、所属時期を明確にしえない。このほか、多量の流木、少量の加工木（切截・焼痕をとどめる）を検出したが、木器、編物、籠類、繩紐等について未確認である。

以上に述べてきたように、今回の試掘調査ではわずか92m²と小規模な面積の調査であったにもかかわらず、縄文時代を主体にする膨大な量の出土遺物をみた。こうした遺物は、入江状の地形に形成された自然堆積層中に包含されており、いわば生活用具、食料残滓ほかを投棄したような出土状態をみせる。したがって、本来の集落（居住地）は調査地点西方の丘陵上に営まれたものと思われるが、未調査である。

また、遺跡が低湿地に立地することと相まって、植物・動物遺存体の遺存状態がきわめて良好であり、遺跡をとりまく古環境、縄文人の生活の実態を究明するうえで重要なデータを提供するものといえる。従来、九州地方では縄文時代前期に遡る低湿地遺跡の調査例をほとんど欠いていただけに、照葉樹林帯に位置し、しかも大陸に近いという本遺跡の地理的位置とも絡めて、近年問題になっている栽培植物の伝播、大陸との交流、内湾に面した採集・狩猟・漁撈活動の実態を解明しうる可能性を秘めた遺跡として、自然科学的方法をはじめ多方面に亘る調査・分析の必要性が要請されるところである。

なお、本遺跡は昭和60年度に本格的な調査が計画されており、その成果をも併せて本報告を上梓する予定である。本概要は、試掘調査によって出土した遺物をすべてに亘って通曉したものではなく、整理中途の現状に照らして、あくまでも予備報告としての性格を了解されることを願うものである。

参考文献

- 1) 正林 譲・藤田和裕ほか 1974『伊木力川遺跡』(多良見町文化財調査報告書第1集) 多良見町教育委員会
- 2) 横田賛次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- 3) 正林 譲・下川達彌ほか 1980『大瀬戸町石鍋製作所遺跡』(大瀬戸町文化財調査報告書 第1集) 大瀬戸町教育委員会
- 4) 池崎謙二・小畑弘己ほか 1984『博多』(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財報告IV) 福岡市教育委員会
- 5) 井沢洋一・山崎龍雄 1980『有田・小田部』第1集 福岡市教育委員会
- 6) 板邦邦洋 1973『曾畠式土器に関する研究—江湖貝塚』繩文文化研究会
- 7) 中村 愿 1982『曾畠式土器』『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 8) 富永直樹 1981「野口遺跡」「久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(久留米市文化財調査報告書第28集) 久留米市教育委員会
- 9) 戸崎勝洋・青崎和憲ほか 1978『阿多貝塚』(金峰町埋蔵文化財調査報告書第1集) 金峰町教育委員会
- 10) 萩原裕房・大石 昇ほか 1979「野口遺跡」「東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』(久留米市文化財調査報告書第21集) 久留米市教育委員会
- 11) 池水寛治・長野真一ほか 1979『莊貝塚』(出水市文化財調査報告書第1集) 出水市教育委員会
- 12) 北村四郎・村田 源 1984『原色日本植物図鑑・木本編I』保育社
- 13) 森 醇一朗 1980『坂の下遺跡の研究』(佐賀県立博物館調査研究所第2集) 佐賀県立博物館

長崎県西彼杵郡多良見町舟津郷所在

伊木力・熊野神社遺跡

—発掘調査概報—

文化振興課

発行日 昭和60年3月30日

発 行 多良見町教育委員会

長崎県西彼杵郡多良見町化原名1800
09574(3)0040・(3)1111

編 集 同志社大学考古学研究室

印 刷 昭和堂印刷

長崎県諫早市長野町1007
09572(2)600080



題字 多良見町長 石丸 義雄

表紙写真 山崎弘之（昭和59年9月初旬撮影）